相變らず吉原で金を費つて居つたが、或る日例の通り吉原から歸ると情けなや自分の家から火を出して、終に丸燒けになつて了つて、船なども十四五艘あつたが、其内五艘は沈んで仕舞ひ、先祖からの在金は今日までに殘らず費つて、只有るものは借金ばかり、情けなくも正德四年の夏遂に材木町の店も自分が何うする事も出來なくなり、番頭の庄兵衛と云ふのが近頃家を持つて居りましたが、此庄兵衛が金五千兩で紀文の家を讓つて費ひ、紀文の借金を皆自分が引受けた、紀文は其五千兩を貰つて、深川八幡の境内に退いたが、其五千兩の金で以て先ず第一に女郎を請出して女房にし、殘りを近邊の者に貸付け其利で生活すると云ふ樣な境遇になつて了ひ、ドヽの仕舞ひには此人、永代橋の手前佐賀町河岸で行倒れになつて仕舞つたと申します、百萬兩の大金を費つて行倒れとは、實に果敢ない最期で御座います、此葬儀も奈良屋茂左衛門が立派に致して、爲めに紀文の墓は今に深川八幡の境内に殘つて居ります、此お話は後程更に申述べまする、奈良茂に於きましては今度の婚禮にも

施しを致しました、斯く新築祝とか結婚祝の度毎に色々施しをするに依て、其評判が宜しくなり、又今なら新婚旅行と申す樣に、今度女房になつたお梅を連れて番頭彌兵衛と共に箱根へ湯治にでも行かうと思つて居ると、何うした事か町奉行の中山和泉守樣の使者神田藤十郎樣御出張に成つて　神「奈良茂、町奉行中山和泉守樣が其方に尋ねたき事あるに依り、御役所へ出頭する樣、拙者使者として參つた　茂「ヘツ私に……何か御用で御座いまするか　神「何の御用か拙者には能く解らぬが、何か取糺す可き事があるとの事　茂「私は何も存じませんが……何か夫では不屈あつての御糺しでも御座いまするか　神「ウン本來ならば番屋へ行つて、充分お前を取調べるのであるが、番屋へ入れて取調べるまでもない、此の神田藤十郎更めてお前に聽く、お前は本所錦糸堀に住む彼の本所での惡侍として評判高い大久保右衛門と何か譯でもあつたのか　茂「ヘエ左樣で御座います、彼の大久保右衛門樣は能く存して居りまする、貴殿方も御承知で御座いませうが、私宅のまだ燒けぬ前亂暴狼籍

を働いて、私の家へ乗り込んで來られた人　神「オー夫は承知して居る　茂「其後永代橋の袂にて此私を殺さんと致した所、前の女房のお糸が之を防いで呉れたと申す次第　神「其大久保右衛門が、昨夜横網の坪内半次方に於て、仲間の者兩三名と共に殺されたに依り……　茂「エッ、坪内様のお屋敷で三人共――全體何云ふ譯で御座います　神「何云ふ譯か解らぬが、噂に據れば奈良屋茂左衛門が、坪内の屋敷に忍び入り先頃の恨を晴したと云つて、貴様に疑が掛つて居る、貴様が持つて居る脇差は關の孫六だな　茂「左様で御座います　神「夫を一寸持つて來い」と持つて來させ、鞘を拂つて調べて見ると確かに錆びて居ります

（第五十四回）

大久保右衛門を殺した疑が奈良茂にかゝり神田藤十郎様が出張して秘藏の脇差關の孫六を調べて見ると確かに錆がありますから　神「これは錆がある　茂「ヘエ之は長らく打捨てゝ置きました故　神「兎に角此關の孫六を携へ其方は中山様の御屋敷へ出頭しなければならぬ」と云はれて流石の奈良茂も大に驚き　茂「オイお梅、俺は之から名主の小林様と共にお上へ出るが、首尾好く申譯が立てば下れるが左もなけりや今を時めく奈良屋でも、紀國屋同様情けない運命になるやも知れぬ、若し牢へでも入つたとて驚くには及ばぬ、牢へ入つても此奈良茂は悪事を働いた次第ぢやないから、然し彌兵衛これから渡邊様や向井將監様、大久保加賀様の御重役にもお話し仕て成る可く取持つて呉れ、又新井白石先生にも茂左衛門は今度斯云ふ事になりました、若し牢へでも入つたらお上へ宜しくお助けの事を願ひたいと頼んで呉れ多くの手續きもあるから大丈夫とは思ふが」と心配ながら衣類を更め袴を穿いて立出んとする時　梅「旦那様、何んとも申上げやうが御座いません、今度の御災難ヒヨンな事に成行きましたが若しも大事に至りましたら何よりお身體をお大切に……　茂「オ、若し牢へでも入れられたら差入丈けは何分頼む」と云ひながら家を出まし

た、斯くて今奈良茂は町奉行中山和泉守の屋敷に引出されて砂利の上に名主町役人と共に並んで居る、間もなく電形の唐紙を押し開けて立出でられたは今年四十一に相成られる中山和泉守時春殿、軈て正面の座に著き給ひ、與力同心を始めとし其他のお役人ズラリと居並びました、すると和泉守殿「靈岸島の地主、家持奈良屋茂左衛門面を上げえ　茂「ハ、ッ　和「何歳に相成る　茂「二十三歳に相成りまする

和「其方事近頃身持放埒の由全くなるか　茂「却々以て身持放埒など致したことは御座いません十五歳よりして家を預り父に代りまして諸お屋敷をば廻り、今では家の主人、親類縁者も私に指す者は御座いません　和「然し其方は大分に施しを致す、殊に出火の砌は多くの町人を賑はし、莫大なる金を出したのは感心の至りである、けれども夫は表向き、其裏面に至つては悪しき事のみ致して居るとのこと、何うぢや　茂「是はお上の御役人のお尋ねとも存せられませぬお言葉、私悪き事などは致しません、お取調べに相成れば直ぐ相判ります　和「其方は紀國屋文左衛門の

妹、お糸と申す者を妻に貰ひし由なるが夫は如何いたした　茂「其者は不愍ながら悪者の手にかゝり重傷を負ひて死亡いたしました　和「大久保右衛門なる者を存じ居るか　和「大久保右衛門……名前だけは承知して居りまする　和「然るに前夜其方、坪内半次郎方に參り、其右衛門を始めとし其他の者をば斬殺したに相違ないと云ふ事ぢやが何うぢやな　茂「これはしたり私人など殺した覺えは御座りません

和「其方は眞影流の極意に達し居る由、而して其方宅より證據として取寄せたる品々の内、其方が帶せし此關の孫六の穂先錆びて居るが其以前用ゐた事があるか、又大久保右衛門が所持なせし後藤某作の小柄、確かに之は右衛門の脇差にあつた小柄に相違ない此覺えはあるか　茂「之は恐れ入りました、左様で御座いまする、今に至つて申上げるも如何で御座いまするが昨年の九月十七日で御座いましたが、私が木場へ靈岸島より立戻る折柄、永代橋の袂に於て私に斬附けた者が御座いまする、所へ紀文の妹お糸が參りまして私を助けて呉れました、此お糸は私の妻で御座いま

する、其折柄永代橋を渡つて逃げ行く者を後から追駈け押え様といたした時、其者が投付けたる手裡剣、私の肩へ中つて止まりました、其時私は火事装束の刺子を被て居りました故助かりましたが、其手裡剣は後の證據と取置きました、夫を當時お上へお届けしなかつたのは私の誤りでは御座いますれど、夫があつたとて何故に私が右衛門様を殺したことになりませう、坪内様とかの御屋敷も私は存じて居りませ、せん

（第五十五回）

奈良屋茂左衛門「私は坪内様のお屋敷は存じませんが、其お屋敷に於て大久保様始め何人か殺されたので御座いますか　和「夫は大久保右衛門に坪内半次郎と申す者今一人は矢張其方宅へ參つたこともある西口吉次郎と申す者が討れて居る　茂「西口吉次郎様と云はるお方は私の宅へお出になつた事は御座いません　和「或はない

かも知れぬ然し其方が常に下げて居る印籠が其場に落ちて居つた　茂「エッ、私の下げて居りまする印籠が……」和泉守は其印籠を取出し「これ奈良屋、此武藏野に月の蒔繪の印籠は、確かに其方が所持なしたるものに相違あるまい　茂「オッ、夫は私の……ハテ合點が行かぬ、何日ぞや紛失したる其印籠が、坪内殿のお屋敷にあるとは扨ても不思儀……して何か紛失物でも御座いましたか　和「オー金子百兩をば奪つて行つた様子、然し之は坪内の家に百兩の金がある可き謂れなければ、多分僞りであらうと思ふ、右の通り半次郎女房お龜と申す者、其他一族より訴へ出でた、何か覺えがあるか　茂「私の何より證據は、近頃新らしく妻を貰ひまして、靈岸島の家に昨夜も一昨夜も居りまして、何處へも外出は致しません、此所に居りまする五人組が確かな證據」片側に居りました五人組の佐兵衛、傳兵衛、丹次郎、八右衛門、九兵衛「ハイ夫は確かで御座いまする　和「兎にも角にも調べ中入牢申附けそ」と情けなや奈良茂は役人に引立てられた、今までは何處へ行くにも供を連れ、錦の

褥の上に据つて三度の食事も贅澤三昧全盛を極めた奈良茂、入牢と聞いて如何に驚いたか、けれども最早詮方なく五人組から半紙と手拭とを受取り、袴を脱いで、

茂「一寸行つて參ります」一寸行つて參る所も餘り好い所ちや御座いません、侍ならば上り屋へ入れて置きまするが、奈良茂は町人でありまするから直ぐ傳馬町の大牢へ入られましたのは、恰で金箱が牢へ飛込んだ樣で御座います、牢内には疊が五疊許り敷いてあつて、其處には大名主から一番役二番役と云ふ者が居るが、其他に役人は誰も居りません、入る時は入口で眞裸體にしてポンと尻を叩いて放り込みながら「新入りで御座い」すると二番役が「ヤイ新入手前は何處の野郎だ、商買は何んだ、兇狀持ちか新米か明瞭云はねえと極板を喰はせるぞ、天下三奉行より他にはない恐ろしい傳馬町の大牢だ、命のツルは幾許持つて來た」牢内の言葉は皆違つて居りまして、ツルと云ふのは錢の事だと云はれて奈良茂も始めて解つた位、奈良茂が牢へ入りましてから間もなく石邊帶刀殿が來て、今日入つた者は江戸町人で最も

名高い良奈屋茂左衛門なれば、牢内の者今日より致し、不禮な事をしては相成らぬ、茂左衛門は町人ながら將軍樣御成りの際お目通り申した者、今回少しく疑ひあつて今度の入牢、牢内の者左樣心得よ」と云はれ種々差入までして呉れましたから、茂左衛門の喜びは此上も御座いません之を聞いて一時半九郎、金卷清吉、鬼虎の傳次の三人「是は奈良屋の旦那、何うか此方へ」と叮寧に申しますが、何方を見ても酷い所だなと思つて向ふを見ると牢名主の席丈けは疊も布團もあるが其他は板の間、牢内では煙草も茶も飲めぬとの事、實に情けなく思つて居ると金卷の清吉と云ふのが「奈良屋の旦那、私は金卷の清吉と申まして、別に惡い事を致した者では御座いません、只强盗殺人罪で……　茂「夫りや餘り善くないな」今度は鬼虎の傳次「私も盗みを致しまして遂に此牢へ放り込まれました」牛若小僧の捨藏「私は牛若小僧の捨藏で、姦通人殺辻斬追剝丈けで餘り他に惡い事も致しません　茂「餘り惡くない所ちやないな」左樣に挨拶されるから茂左衛門も困つて仕舞つた、飯と申しても

二三日は何うしても食べられない、其内卵が入る菓子が入る、水菓子も入つて來ると云ふ樣になりましたから、牢内俄に豐になりました

（第五十六回）

扨て奈良茂が牢へ入つてから、多くの差入物があつて牢内が頓に賑やかになりましたから、牢の連中は大に喜び、一つ旦那にスッテン踊りを御覽に入れませうと、素天素天素天々、素天ばかりは參りません、後から好いのが參ります、素天々々奈良屋の旦那は金がある、と恁んな踊などして皆が奈良茂を慰めて居りますると今度一人の新入が來た、例の如く「新入で御座います」と放り込む、すると金卷の清吉「汝ア何んてえ云ふ名だ　新「松次と申します　清「何處の奴だ　松「橋本町で……

清「手前其處で何をして居た　松「私は其處で肴賣をして居ります　清「肴賣か、松「へー親仁が體が惡ふ御座いまして　清「命のツルは持て來たか　松「食ふに困

つて泥棒して、夫で捕つて參つたのです、牢へ持つて參る錢はありません　清「此奴此意氣な事を吐かす、極板喰はせるぞ　茂「清吉樣　清「ハイ　茂「私は其男の泥棒した次第をば一通り聞きたい、貴方々の樣に無暗に人殺や泥棒をした者とは思はれぬ、困つて遂に恁んな者になつた次第を聞いて後そう云ふ人は眞人間にして遣りたいと思ふが、何うです　清「成程旦那樣は見上げた者だ、こう云ふ者を人間にして遣ろうと云ふ深い思召し、そうなくてはなりません、金持は夫が當然だ、サ松傍へ行つて申上げろ　松「へ、、私は橋本町腐肴屋松右衛門の悴松次と申します　茂「腐肴屋とは何だ　松「肴市の餘り物ですから腐つて居ります　茂「厄介な奴だなア　松「私の肴を食べて大概な人は皆醉つて仕舞ふ、折々は死ぬ人も出來る位で其辯河豚などは新らしいのですが、並の肴は大底腐つて鰯などは目が赤いのも通り過ぎて、黄色のを持て行きますので、お客樣も却て腐つた方が好いのと見えますけれど割に中らないもので　茂「冗談ぢやない困つた奴だ、而してお前が賊を働いた

と云ふのはどう云ふ譯だ　松「親仁の松右衛門が大層身體が悪い所へ私は不景氣と來ましたからお米を買つて來て粥にして食べさせる事も出來ず、據なく町々を廻り歩いて居る内に、お腹も空いて寒さも寒し、ヨロヨロ人形町まで來て見ると、其處に布團屋が御座います、而して其布團屋樣の店で豆餅を燒いて居りまして、店には布團が澤山御座います故、此布團があれば結構だ、親仁が身體が悪くつて居るのだから、一枚でも好い追々夏にでもなると骨が痛かろう、此布團一枚あつたらば親仁の骨の痛みも治ろう、と店の者が奥へ行つたのを幸ひ、ソッと這入つて腹も空いて居る所から、咄嗟豆餅を二ッ三ッ食つて、布團一枚擔いで出掛けたら、直ぐ捉まつて仕舞つて、叩かれて打たれて、其の揚句此牢へ放り込まれたので　清「貴樣ア豆餅と布團とで捉まつたのか、問拔け奴、世界中の間拔けを獨りで脊負つて居やがる、豆餅食ひながら布團など擔いで出りやア、捉まるのは當然に　茂「成程そうであろう、松次お前はまア氣の毒だな俺は方々のお屋敷の御用を勤め、今ぢや江戸一

とか云はれて居る奈良茂、先づ深川の河村か靈岸島の奈良茂と云つて、並びない者になつて居るが、世の中は有爲轉變、金ある者は無き者を助けて遣らねばならぬ、今江戸市中には伊勢屋近江屋上總屋下總屋中にも京大阪に大きな店を持て居る越後屋でも、大丸でも困る者を餘り救つて遣らぬのはまだ〳〵至らぬ所がある、お前が若し世の中へ出たら奈良茂の所へ來い、今後何んな事になるか知れぬが、俺が居なくともお前一人や親仁はどうかして遣る、先づ差當りお前の家へ金十兩に米十俵奈良茂から送る樣に手紙に書いて遣る　松「へエッ、米十俵に金十兩、そんなに入れる所も御座いません　清「松、頂いて置け〳〵、手前は親幸行だから下さるのだ　松「死にかゝつて居る親を措いて、牢へ入れられ養ふ事も出來ないのは殘念でなりません　清「だから奇良茂の旦那が養つて遣ると仰るぢやアねえか

（第五十七回）

傳馬町の牢内で奈良屋茂左衛門、今度新に入つた松次と云ふのが、親の病氣を養はんとして、知らず〳〵泥棒を働き入牢したと云ふ、次第を聞いて憐れに思ひ、何うか眞人間に仕て遣りたい、夫に就ても今も松次が重い病氣の親を殘して牢に入れられた故何うしても親の事が氣にかゝる、奈良屋の旦那何うぞお救ひ下さい」と云ふのを聞き　茂「オー及ばずながら俺が助けて遣ると」直ぐに手紙を書いて、自分の家に持たして遣ると、其日の中に松次の親仁松右衛門の所へ、米十俵と金十兩を曳いて參つたから近所の者等大に驚き　甲「大變だ〳〵松次の親仁の家へ靈岸島の奈良屋樣から米十俵金十兩も入つたぜ　乙「松次が親孝行だからだ、俺もそう云ふ子が欲いなア」などと騒いで居ります、此方は牢内の一時半九郎、奈良茂の樣子を見て、或る夜　半「旦那、貴方の樣な豪いお方、まア下々の者には活神樣か活佛樣とも思はれるお方が、こう云ふ所に一日でも置くのは氣の毒だ、神も佛もねえ事か茂「イヤ然ふ云はれると却て困る、何日か俺も世の中に出るから心配するな、神は誠を照すと云ふから親切は嬉しいが決して心配して呉れるな」一時半九郎も左樣な譯なら宜しふ御座いますと、奈良茂に知らせず筆を執つて書いた手紙が、松次と同じ橋本町の、以前より自分が名染なる、命知らずの綽名を取つた、達五郎の女房般若のお春の宅へ届いた、達五郎其手紙を見て「サお春、こう云ふ譯だから是から早速訴へて出なけりやならぬ」と二人が手を執つて、中山和泉守の御館へ訴へ出で、今年の四月晦の晩坪内半次郎方へ忍び入り、大久保右衛門を始め坪内半次郎等を殺し後の露見を恐れて奈良屋で盗んだ印籠を側に置いたと、訴へ出ましたから、調べて見ると成程僞りない樣子、斯く大久保以下三人を殺した罪人が擧れば、固より罪の無い奈良茂、晴天白日の身と成りまして、目出度く出牢と相成りました、出迎ふ者は諸親類を始め出入の者、職人仕事師商人武家等三千餘名、就中吉原に於きましては内懇者と申す者が出來た時代、其名も高いお文、お高、お龍、お福、お汐等が二代目二分判吉兵衛を先に立て、何れも綺羅を飾つて出迎へ、傳馬町の大牢から靈

岸島の屋敷まで、出迎へやら見物やらで人間の山を築いた、茂左衛門は大に恥入り困つた事と自分は思ふけれど仕方がない、久しぶりで我家へ歸れば、深川の隱居所からも殘らず出迎へてまア能く歸つて呉れたと母親の言葉　茂「私も無事で歸れまして目出度う御座います　母「こんな嬉しい事はない」と云つて居る處へ大勢の者がやつて來て口々に「旦那今度はまア飛んだ事で……けれども早くお歸りになりまして、何により御目出度う御座います　茂「別段目出度い事も無い、俺は罪を作つた事のないのを、御上の間違いで縛つたので、元來俺を押へたのが無理な話で出て來るのは當然だ、夫に就ても彼一時半九郎が俺の爲に元の名染の、磐若のお春とやら達五郎とやら云ふ人に、大久保を殺したと訴へ出させたのは、彼人達には氣毒千萬の話だが、殺たのが實なら俺の出のは尙更の事、お梅は何うした」お梅も其處へ出て「旦那樣お歸りなさいまし、此程から少しく病氣で居りまして、お出迎も致しませんでした、何ぞお許し下さいまし」渡邊左近も傍へ來て居る「是は渡邊の兄上樣今日は何と云樣も御座いません、サ彌兵衛お盃を…」と祝の酒宴が始まる、渡邊左近は親類の總代になつて居り、八丁堀の用達衣屋銀次郎なども夫へ參り、目出度〳〵と盃が順に廻り逆に廻り其内深川の奈良屋忠右衛門、之は茂左衛門の兄弟分に當つて居りまする、此忠右衛門も來て萬事世話致し、目出度く祝の酒宴も濟みしまた

（第五十八回）

扨て奈良茂も無事で牢屋から戻りました事故、諸親類は申すまでもなく、今日まで奈良茂に少なからぬ恩のある多くの人は、此上もなく喜んで居りまする、けれども如何なる者でも、へ入つた揚句は身體の具合が惡いもの、奈良茂も漸く無罪となつて我家へ歸つたが、何うも鹽梅が惡いので、毎日家屋にのみ鬱々いたして居りましたが、そう身體が惡いのに江戸にばかり居つては不可ん、何處ぞ箱根へでも湯治にお出なすつたら、と云ふて呉れる者があつて、夫もそうだ箱根へでも行つて見やう

か、と是から箱根へ參つて別に今江戸へ歸る程の用も無い所から、妻のお梅や番頭彌兵衛と共に、彼是れ一年許りも其處に居つて、全然身體も良くなつて了ひ、以前よりも勝つて健康になりましたので、奈良茂夫婦は大に喜んで居りまする、其永い間には江戸から渡邊左近も來るし母親も番頭も來る歸る、絶えず行きつ戻りつして居りましたが、後には食物も贅澤になつて、箱根の料理では飽き足らず、江戸から色々の料理を取寄せて贅澤三昧、其處でお話は一寸變りまするが、之も奈良屋の親類なる衣屋銀次郎の娘で今年十九歳になるお町、奈良茂の樣子を見てまあ本當に男らしい男、私の家とは大して深い緣でもないけれども此頃も奈良屋へ行つて見れば贅澤三昧、私も女と生れて奈良茂樣の樣なお方のお嫁になれたら、まあ何んなに嬉しからう、などと獨りで思ひ込んで八丁堀の自分の家に欝々として居ります親の銀次郎は又子にのろい方で御座いますお町は太織の衣類に郡内の抱卷、今年十九の娘盛りの髪を亂して、枕に取付いて居りまする樣子に、女房のお鹿と二人で　銀「何

うしたお町、大分悪い樣だがオイ〳〵　お三「お三や」　お三と云ふのは仲働の女　銀「お三お醫者樣に診て貰つたら何んだと云つたい　お三「へエ、大して悪いのでも無いそうで、何んだか風邪だとの事で御座います、而して熱が少しおあんなさつて氣が閉ぢて居ると斯ふ仰りました　銀「氣が閉ぢて居ると、夫は何う云ふものかなア、何か思つて居るのか　お三「胸に一杯思つて居らしやるので……　銀「胸に一杯、何をそう思つて居るのだ　お三「何んだか矢張り、申し難いので御座いませう、銀「云ひ難い事と云ふと、男でも思つて居るのか　お三「そふかも知れません」　銀「次郎お町の傍に行つて　銀「お町お前詰らない事を思つて居ては困るぢやないか又當地流行の役者にでも惚れ込んで來たのか、何んな役者だい、役者でも馬の足などでは困るが、當時の立者にでも惚れたと云ふなら又何うにかして此家の養子にしても宜い、夫ともお前を嫁に遣つても宜いが、役者かい　町「否え　銀「ハヽーぢや何んだな、方々のお寺へ行く彼の若衆か　町「そんな者では御座いませんよ　銀「矢

張り戀だ、戀病いだお三何うだい　お三「左様戀で御座いませう　銀「鯉か鮒か知らぬが、俺に何も云はんぢや困るよ、親子の間だ皆云つて了へ　お三「親子の間ど申ても、豈夫お嬢様には仰れますまい、夫に就て旦那様お嬢様は家の後をお取りなさるのですか　銀「夫りや家には銀太郎が居るから、彼か後を取るのでお町は嫁にでも遣る、嫁に行きたいのは何處だい、戀人かい夫ともお醫者かい、家へ來る醫者の顔は飯櫃面だし、豈夫彼の飯櫃面に惚れたのではあるまいな、お三知らないかお三「そふぢや御座ませんよ、お嬢様は餘程立派な御身分の方を思つて居らつしやる　銀「立派な御身分の方つて、豈夫將軍様でもなからう　お三「馬鹿な事を仰いまし　銀「では御老中か若年寄……そう云ふ方は見た事もあるまいが誰だなア、お三「そんな大小など差す方では御座いません、イキなスラリとして役者で云つたら誰で御座いませうか、まア雁次郎とでも……」今から先の話もしまいが　銀「全体誰だろう役者の様な人……　お三「實は旦那様、お嬢様の思つて居らつしやる方は奥様がありますので夫を追出してからでなければ……　銀「エッ大變な事を……そんな人を思つて向ふの奥様を追出したりすりや罪人だ

(第五十九回)

銀「お内儀の有る人に焦れたつて厄介だなア、まア全體何處の人だい　お三「エーお家の御親類の……奈良茂様で……　銀「ウオーッ」と銀次郎驚き「成程豪い者を見込んだなア、何うだいお鹿呆れたぢやないか　お鹿「本當に困りましたねえ、まア茂左衛門様なんて思ふにも事を欠いたもんだ、夫りや男振も好し又年もお町とは大層な違ひではないけれど……　銀「年などは幾年違つたつて構やしないが、奈良茂には今渡邊様の妹が來て立派にお内儀になつて居るぢやないか、夫も先のお内儀のお糸様が出た時分にでも、そう云つて呉れたらまた考へもあつたのに　町「其時分には、まだ年も若くつて思ひを懸けりやしません　銀「成程夫はそうだ、其時分

にはまだ屢々出入もしなかつたから仕方がない、夫に就ても彼の渡邊のお梅の代りにお町が嫁に行けば、奈良茂の身代の半分は此衣屋に引込む事が出來る……悴の銀太郎を呼べ、オイ銀太々々」此銀太郎又中々の放蕩者で御座いまして、今も酒に醉拂つて其處へ來て　銀太「お父様何んですか　銀「何んでもやない、まア其處へ坐はれ何んだい其容姿は糸織のギラ〳〵する衣物に緞子の帶なんか締めて居やアがつ　商人がソンな帶を締る奴があるかい、モツと規調面な服裝をして居れ道樂者奴が、貴様の容姿は丸で俠客か何かの様だ、如何に御用達とは云ひながら常には唐棧の衣類に小縞の羽織で結構だ　銀太「大きにお世話だ　銀「銀太郎、お町が病氣に就てな……　銀太「病氣なら醫者に掛ければ治らア　銀「所が醫者に掛けても治らぬよ、者婆扁鵲何んな醫者でも戀の病は治りやせん　銀太「オヤお父様貴方こそ今日は少し變だ、戀の病と云つたねえ　銀「ウムお町は戀患ひをして居るのだ　銀太「私も少々戀の病で……　銀「手前の病は吉原だらう、お町の戀は奈良茂だ　銀太「ヘエ

ツ、お庭の櫻只見た許り、茂左衛門は駄目だよ　銀「所が夫を何うかして此方の手に入れば、茂左衛門の身代半分は此方のもの、銀太何うだ　銀太「フーンお父様、成程巧い考へだねえ、先づお町を向へ嫁に遣り、お町の口車で茂左衛門を煽りさへすれば彼奴は何うでもなる、彼奴は又俠客の向ふを張ると云ふ様な人間、其内お町に氣の移らねえ事もなからう、此頃は一年程も箱根へ行つて身體も大變善くなつて居ると云ふからお父様、お町を連れて箱根へ湯治にお出なさい　銀「夫に就てお梅様を殺すのもチト何んだか　銀太「殺すのは善くないかね、お梅様をば茂左衛門に飽きさせる工風をして、而して縁を切らせるので子供がないのを幸ひ縁を切らせる工風が何よりだ　銀「其工風は全體何云ふ風に行つたらば縁切になるだろう　銀太「細工は流々仕上げを御覽じろ、而し此銀太郎獨りぢや出來ぬ、お父様一つ相談する人がある　町「お父様何うぞ左様な惡い事はしないで、私はモー斷念ました、思ひ焦れて此儘死にまする　銀太「何に、焦れ死なんかするより、俺が又巧い工風をして、

奈良茂へ飛込める樣にして遣る、仕上げは流々俺の胸にはチャンと機關がある」お町も魂消て仕舞ひ、恐ろしい父や兄と思つて居りますると、父の銀次郎「銀太相談する人は全體誰だい　銀太「惡事にかけては汝目のない、常に此家へ出入する醫者の下村玄達、彼奴は何んな惡事でも金子になる事なら何んでも行る、醫者をドクトルと云ふけれど、奴は毒盛りだ惡い事を云ふ樣だが、本當に彼の下村玄達は八人許り子殺しをした、恐ろしいぢやありませんが、子供八人墮胎して金を取り、御殿女中三人も殺した人殺だ、まア兎角彼奴を呼んで膝とも談合……　銀「然ふすりや宜いな、善は急げ使を遣つて下村を呼ばうと、遠くもない龜島町の下村玄達を呼びに遣つた、玄達は今賣出しの醫者で年は四十幾年、縞の衣類に黑の羽織、緞子か何かの帶を締め込んで丸頭の半藥鑵で殘りの髮毛を後へ撫下げ、醫者と申してもホンの幇間醫者、自分勝手に一寸研究した位、其の少しの研究も何うやら玄達のは毒盛の法らしふ御座います

（第六十回）

扨て衣屋銀次郎が呼びに遣つた醫者の玄達ツカ〳〵這入て來て　玄「是は衣屋の御主人何か急に御病人でも出來ましたかい、オヤ銀太郎樣も御在ですか、貴方は又近頃大分道樂病に罹んなすつた樣子、ドレ御診察致しませう、御免下さい」と云ひながらヒヨイと手を執うとする　太「冗談云つちや不可ません、實は病人では無いので　玄「病人で無い、ぢや御主人何んですか　銀「サ是は膝とも談合ぢが、貴方御迷惑ではあろうがお引受下さる譯には參りませんか、巧く行けば一千兩俺が貴方に出す　玄「エッ、一千兩ですか、此下村玄達に一千兩下さると云ふのは、全體何う云ふ御病人であるかは存じませんが、及はずながら、其御病人の診察を一つ私が致しませう　太「全く引受けて下さる事なら、其話をするが他言はしないと云ふ誓ひをして貰ひたい　玄「ハヽア他言をせぬと……イヤ解りました、毒殺か　太「オッ

トさう〳〵其毒殺はお前様年中して居るぢやないか　玄「銀太郎様何を云ふんです年中毒殺なんかして居たら磔柱に架けられる、まア夫は兎も角貴方の云ふのはどう云ふ毒殺で……　銀「大きな聲ぢや不可ん、まア其處へ弓矢八幡決して他言はせぬと書いた　玄「銀太様生意氣な事を云ふな、早く其譯を　太「實は俺の妹お町が靈岸島の奈良茂に惚込んで、何うしてもお嫁に行きたいと云ふ、お前様も知ての通り衣屋は彼の奈良屋とは親類で、夫がどう云ふ譯で親類かと云ふと、奈良屋の先代安休が未だ世に居た時分、其妹が此家の養女になつて居つて、今の母の姉同様だつた所から双方親類も少ないので出入する様になつたんだが、其處で此奈良茂の身所を幾許か此方へ削りたいと思つて居ると、お町が奈良茂の嫁になれねば焦れ死ぬと云ふ程惚込んだのを幸ひお町が首尾能く嫁に行けば、今を時めく奈良茂でも何うにかなるけれど、一つ邪魔になるのは今の女房お梅様、大層此頃は仲も好く二人が箱根へ行つて居るが、今丁度秋ぢやあるしお町を連れて親仁をブラ〳〵遣ろうと云ふのだが、何うだいお前様も一所に行つて、巧く茂左衛門に取入り、而して殺さず活さずお梅をば、何んとか血でも吐かせるとか、毒でも盛つて自然臓腑でも腐さすとか又は頭の髪が抜けるとか、何んとかして茂左衛門に厭きさせる工風をして呉れ、巧く行けば一千兩遣る　玄「成程千兩の金になる事なら、此下村玄達玆に奇々妙々の計略がある、私の幟幕の内に絶妙の計略があるから御心配は無用　太「何分頼んだぜ　玄「何日お立ちです　太「明後日立つ事にしやう何うせ茂左衛門も涼風が立つて追々寒くなるから、湯本の福住の方へ下るだらう夫故お町を連れて福住に居ると知せたら早速龜屋から下るだろ　玄「ぢや然う云ふ事に」と悪事に長けた人々早速相談をして手紙を出す、所謂其時分の三度飛脚と云ふので福住へ行く旨を知らせた、茂左衛門も衣屋が福住へ來るなら自分等も下ろう、而して今年中に家に歸り、新年を迎へるであろうとお梅を促し番頭を伴ひまして木賀の龜屋をば立つて、湯本の福住へ衣屋よりも先に參りました、此方は例の銀次郎並に娘のお町母親のお鹿夫に下

村玄達の幇間醫者を連れて、駕籠で以て乘込みました、奈良屋茂左衛門に於ては縞の袷に博多の帶、衣屋を出迎へまして「お前樣達が來ると云ふから、俺は先へ來て居つた　銀「是は奈良屋樣、モー身體はスッカリ善くなりましたか　茂「ウン箱根へ來てから、全く此通り丈夫になつた、オヤお町樣も來たか、お梅、お前の友達のお町樣が來たよ　梅「オヤ然うですか、大層お加減が惡いやうですが、如何です

（第六十一回）

銀「お町も少しく身體が惡いので悴も心配して、お父樣箱根へ湯治に連れて行けと斯ふ申しますので、夫に就て此下村玄達樣も一所に……　茂「オヤ貴方は何時ぞや私の家へも來て下すつた、今小傳馬町から龜島町へかけて一等のお醫者樣と評判の高い下村玄達樣、而して貴方は大層產科の方が偉いそうで　玄「是は何うも奈良屋の御主人、然うお譽めに預つては玄達面目も御座いません　茂「面白があらうと無

からうとそんな事は構やしない、まア一つ御酒でもつけませう　玄「有難う存じます　梅「木當に皆樣能く來て下さいました、私も嬉しふ御座います　茂「ア、之で味方が殖えた、吉右衛門何か鮮らしい肴でも」と云つて嬶て酒宴が始まつた、其間も下村玄達、キョロ〳〵目で見廻し成程美しいお梅、之を不具にするは惜しいが併し金になることだから何日か何んとかして遣ろうと思つて居ると　茂「好い所へ下村樣が來た、外では無いがね下村樣此お梅の肩に腫物が出來て甚く腫れて居るが、之は速く治した方が善かろうか、又は自然何うにかなるまで恁うして置く方が宜かろうか一寸見て下さい　玄「へ、ー眞平御免下さい、では奥樣一寸お肩を診察致しませう！ハ、ー是は何んですな、赤く座取つて痛むでせう　梅「大變に痛いので御座います　玄「切つた方が宜しう御座いますな　茂「切つて直ぐ癒りさへすれば切つた方が宜い　梅「では貴方切つて下さいましな　玄「へ、エ切つて差上げませう、然し今日は何んですから又明日でも切る事に致しませう」と其夕暮れ時プラリと表

へ出てハナな彼の肩の腫物が一つの手段、何んとかして遣らねばならぬと考へつゝ其邊を歩いて居ると、向ふから恐ろしい痘瘡の小兒を抱いて來る小娘がある、夫を見て玄達「オイ〳〵其兒は痘瘡ぢやあないか　娘「ヘエ松川痘瘡で仕樣がないので……　玄「ウン甚い痘瘡だなァ」と云ふ心の中には「ヤ彼のお梅の肩の腫物の中へ此松川痘瘡の膿をソツくり入れて遣れば、三日過たぬ其間に熱が出て彼の美人が大痘斑……恐くすりや死んで仕舞ふ……イヤ締ての痘瘡」締ての痘瘡なんてえものがあるものぢや無い　玄「サ、私が膿を除つて遣る」と巧く胡魔化して其小兒の天然痘の膿汁を取つて歸つて、翌日は知らぬ顏して　玄「サお内儀、今日は私が貴女の肩の腫物を切つて差上げます　梅「何うぞお願ひ申します、其處で肩の腫物を切つて入れたのは昨日の膿汁、之が牛のならまだ好いが人間のを入れたのだから堪まつたものではない、暫時たつて腫物は治つた樣なもの〻俄に大熱を起した、此頃天然痘が流行して居る所とて下村玄達も共に驚いた顏をして介抱して居る流石に奈良茂も

心配して江戸から態々醫者を呼んだが入痘瘡とは氣が附かない、全く天然痘だ、此頃箱根近邊で流行るから夫が傳染したのだと思つて居る、其後十餘日で漸く治つた治つたのは善たつたが、今まで天女かとも怪しまれた美しいお梅が、悶れ二目と見られぬ松川痘瘡に鼻も口も一所かと思はる〻大痘斑、お町や銀次郎は占めたと喜び玄達の綱工は流々巧く一千兩に有附いたと共に喜んで居る、夫と反對に奈良茂は涙を流してア〻可憐相に生れもつかぬ不具者になつた然しまア身體さへ治れば好い、茂「お梅俺はお前に云ふが以來鏡は見て呉れるな、必ず鏡ばかりは見て呉れるな、鏡を見れば俺がチトお前に云ひ分がある、夫でも見ると云ふなら俺の家には置かれぬ」と云はれて、お梅「然ふ仰有れば鏡は以來必ず見ません」と多分自分の顏が二目と見られぬ樣になつたのを、旦那樣がお情けで然ふ仰有るのかと涙に暮て居りまする、其内お町、銀次郎も玄達も戻つて了ひ、其後暫時の間、夫婦は只面白くもない箱根の福住に居りまするとと、或る日尺八の音色も憐れに吹いて來た一人の虛無僧

誰かと思つてフト見ると是ぞ自分が甚く信用して居る羽貝十郎左衛門……

（第六十二回）

近頃更に行方の解らなかつた、剣術の先生羽貝十郎左衛門が突然來たので、奈良茂も驚きながら、是は先生では御座いませんかと窺いて見ると、羽貝は例の天蓋を除つて誰かと見れば奈良茂　羽「オヅ奈良屋氏……　茂「まア先生で御座いましたか何うぞお上りなさいまして　羽「拙者も一度貴方に面會してお話したいと思つて居つた、幸ひ今日は其話を致し、夫から自分の考を取極める積り　茂「何う云ふ事で御座いまするか、私も一方ならず心配して居りました、マア何うぞ此方へ……お梅お茶をお入れ　梅「ハイ」とお茶を入れるお梅の樣子を見た羽貝十郎左衛門心の中にア、彼が豫ての梅野井か生れもつかぬ不具者となつたか不愍な者よ人も羨んだ彼の美人が此姿とは變れば變る人の身の上と獨りで熟々思つて居ると　茂「先生人間

の身の上程判らないもの無いですなア、私も罪の無い身で大久保右衛門を殺したと云ふ嫌疑を受け、據なく牢屋へ放り込まれて永い苦しみ、漸く罪の無いものと判つて、晴天白日の身となり家へ歸つて參りました、夫に就ても上役人に色々手を廻して呉れた者もあり、且又牢名主の一時半九郎と云ふ人が大層心配して呉れてどう云ふ譯か判らぬけれど、私の爲めにまア橋本町の達五郎船若のお春とが訴へ出で其物等が大久保等を殺したとなつて居るので御座いまするが、然し私の考へではどうも大久保程の人間をば、容易に橋本町邊に居る者が殺せそうにもないと、斯ふ思つて居るので……まア如何に達五郎やお春が強いかは判りませんけれど、豈夫大久保の樣な者三四人も一時に殺す譯にも行くまいかと思つて私は眞の罪人がまだ外にあるかと思つて居りまする　羽「御内儀はまた何うして……　茂「左ればで御座います女房も恁んなではなかつたので御座いまするが不圖した災難から……イヤ夫より先生はどう云ふ譯で　羽「イヤ御不審は御尤もで御座る彼の大久保右衛門を殺したの

は、誰でもない此正秀　茂「エッ貴方が……　羽「實にお氣の毒だつた、直ぐ訴へ出ればよかつたので御座るが、仔細あつて自分は奥州へ下り、貴方が獄に居る間もお訪ね申す事が出來なかつたのが我が誤り、見ず知らずの者が出て貴方を無罪にさせたと云ふ事や、其後貴方が身體が惡く一年餘も此箱根にお在になると云ふ事を聞いて此通り庵無僧の姿となつて、貴方にお目に掛つてお詫び致さんと此所まで出て來た次第、彼の大久保右衛門等は實に武士の風上にも置けぬ奴、坪内鳥井の奴等と年百年中賭博を爲し、又は町人共を脅迫し現に奈良屋一家を苦しめんとし、其處に居られるお梅樣の、戀路の意恨などが一時に重なつて何日ぞやの騒ぎ、情けない事になつたと拙者も存じ、寧ろ根を斷ち葉を枯すに加かずと、四月十五日の夜大久保以下の奴輩を斬り捨て、拙者は一時身を隱した次第、元より腕に覺えの眞影流彼奴等を殺すに何の仔細があらう、羽貝ならで他の者の爲す事ならず　茂「そう仰有れば先生故に大久保は殺されたので……ー　ヱ恐れ入りました先生、夫ぢや矢張り奈良

屋の危險を飽くまでもお助け下さつたのですか大久保を殺してまでも、奈良屋を助け、此お梅を私の女房に下さつたのですか、有難う御座います先生、私が牢へ入る位は當然です、先生に對し恨む所では御座いません、是れお梅、先生に能くお禮を申せ　梅「ハイ何んとも羽貝先生、私の樣な不束者を斯くまでも……實に御禮の申し樣も御座いません、私が願つて奈良屋へ嫁にさへ來なけりや、恁んな事にもなりますまいに、是もお糸樣が矢張り恨んでお出なさる爲めて御座いませう

（第六十三回）

お梅は尙ほも言葉を續け　梅「私も不圖した病からコンナ見苦しき姿となりまして旦那樣のお情けで以來は鏡を見るなと、お小言が出ましたから、夫から鏡は一度も見ませんが、顔を撫でては以前の事を思ひ出し、涙に暮て居りましたが、昨日の朝フト湯殿の側へ參りまするとー、其水面に映つた私の顔ハッと思つて熟々見ればア、

情けなや鬼か般若か　茂「何ッ、夫では見たのか　梅「否夫りや鏡では御座いません、自然に映つた水槽の、水鏡で御座います　茂「とう〳〵顔を見たのか　梅「ハイ、之では生きて居る甲斐が御座りません、旦那様……寧こう云ふ顔容で以前からあつたらば、旦那様のお宅へ嫁にも來ませず大久保様にも恨まれず、又彼の人も殺されず羽貝様にもお命を縮めれる様な事も、旦那様を牢へ入れる事もなしに濟みましたらうに、皆元はと云へば此私、今の醜さが三年以前であつたらば皆様に御苦勞は掛けまいものを、御苦勞掛けた其揚句此醜さ、此も紀文様のお糸様が恨みであらうと思ひまするし、私は死にとう御座います……御免遊ばせ」と云ふより早く、何時しか帶の間に隠し置きたる髪剃で我咽喉を——　茂「馬、馬鹿な事ッ」と止む

る奈良茂「コレ貴様は何んで死ぬ、氣が狂つたか、奈良茂が渡邊様に願つて貰つた妻のお前、先にはお糸も俺の家の爲めに死んで呉れ、其揚句は俺が牢に行く様な不幸の身の上、夫でも一つお前の様な心も面と同じ美しい妻があるのを何より幸福と

思つて居つた其お前に今又死なれて何んとしやう成程醜く變つた今度の災難、けれど姿は假令へ變つても以前に變らぬお前の心、人は容貌より心が大事、家を治めるにはお前の様な心立の善い者でなくては不可ん、顔の奇麗な者が欲けりや、吉原新宿品川の飯盛なぞを相手にしても宜し、子供がなかつたら、嬖妾を置いても宜い事だ、死ぬにや及ばぬ、そうで御座いませう羽貝先生　羽「流石は奈良屋氏能く云つた、武士も及ばぬ其魂、羽貝も大に感心致した、大久保を拙者が殺しさへしなかつたら、こう云ふ事にもならぬ譯、罪は皆斯く云ふ羽貝正秀にある、然らば御免」と双肌脱いだ正秀、錦の袋より一刀取出し、今や切腹せんとしかたら奈良茂「お待ちなさい先生、女房に咽喉を突かれ又先生に腹を切られた日には、奈良屋茂左衛門態々箱根へ葬送に來た様なもの、且つ又其が爲め再び縄目の恥を受けねばならぬ、貴方は此茂左衛門を又獄へ下すお心ですか　羽「中々以て　茂「夫ぢや先生、立派に男らしく大久保を斬つたと訴へ出て下さい、私も貴方にお子がある事も知つて居る

から、其お子を引取つて何うとも致します、罪のない達五郎や般若のお春が、私しが殺したと云つて牢へ入つたが、何時お仕置になるかも知れません故、貴方が訴へ出て、彼等二人は無罪である、と云ふ證明をして下さつたらば彼等も助かりまする如何で御座います江戸へ行つて町奉行へお訴へ下されては……　羽「成程な、そう云はるれば夫もそう、宜しい切腹は思ひ止まるで御座ろう、して江戸へ戻り大久保右衛門等を殺したは實際拙者であると訴へ出やう、其代り只今の御言葉に甘えて頼むが、地藏橋の片傍、荒物屋の娘お松が腹に宿りしは斯く云ふ十郎左衛門が忰吉松と申す者、其吉松の身の上を願ひ申す……お梅様、面は如何に變らうとは心は氣高い以前の梅野井殿、何分共お願ひ申す　梅「旦那様さへ私をお見捨てなくば、奈良屋の家の厄介者と相成つて、臺所番でも致しませう、他から何んな美しい者が參つても悋氣がましい事も致さず、貴方様の吉松様を私が屹度お預り申します、どうぞ貴方が訴へ出て旦那様が人殺しをしない證明を遊ばして下さい」とのお梅の言葉に

茂左衛門「成程是はお梅の云ふ通りだ、サ今日は御馳走は出來ませんが、明日は御馳走をする」と其翌日は小田原から來た、新鮮な肴で十二分の御馳走をして、羽貝正秀と同道して奈良茂も靈岸島の屋敷へ歸ると、屋敷の者は皆お梅の顏の哀れなるを見て驚き呆れる、羽貝十郎左衛門は夫より別れを告げて町奉行へ訴へて出ました

（第六十四回）

奈良茂と共に江戸へ戻りました羽貝十郎左衛門、早速町奉行へ訴へ出ましたから、町御奉行に於きましては出羽遠江守様お調べの結果上屋入を仰付けられ、同時に般若のお春達五郎をも再びお調べの結果、是は一時半九郎が奈良茂の爲にした事と相判り、兩人及び半九郎も直ぐ出獄する事になり、元の橋本町に歸りました故半九郎始め殘らずの者「奈良屋の家に禮に來た、茂左衛門」此時一時半九郎を始めとし達五郎お春等に充分馳走をした揚句、以後は正業に就く様にと資本の金を百兩宛遣つて

歸じた、是が茂左衛門の偉い所で、二人は共に立派に正業に就て江戸で商人になつたが、半九郎のみはそう云ふ譯には行かず、生涯遊人仲間で兄哥々々と云はれ、奈良茂に何か事があつたら駈附けて一働きやらんと思つて居ります、物語り變つて奈良茂夫婦の仲は至て睦まじい樣なものゝ、お梅は甚く弱つて居ります、隱居の母親も態々出て參り　母「お梅、顏や姿は何んでも構はぬから、お前は茂左衛門に生涯連れ添つてお呉れ、私もお前が氣の毒でならないのだから、決して心違ひしては不可ん」と有難い母親の言葉にお梅も今更ら嬉し涙をハラ〳〵と流し　梅「ハイ、私は決して旦那樣やお母樣の御言葉には背きは致しません」と云つて居りまするが、何うも自分の眉目容が麗しくないので、只氣が鬱々と致し　梅「旦那樣、相濟まん譯で御座いまするが、私に永の暇を頂かして　茂「永の暇を貰ひたいつて、また始まつたな、そんなに云ふなら兄樣にもお話をして見る」渡邊左近を呼びに遣つて、茂「偖て兄樣、御承知の通りお梅も生れもつかぬ彼の不具者、見るも憐れな姿にな

りましたが、是れぢや當人も以前の事を思つては、涙の種になるでせう、然し奈良屋の女房で居たら不足は無かろうと思ふけれども當人は何かにつけ暇を呉れ〳〵と云ふ、定めし黑髮でも切つて尼法師にでもなりたい考でせうが、茂左衛門は美しい時は家に置いて、見憎くなつたら家を出したと世間の人に云はれでもすると、奈良屋茂左衛門商人ながら男が立たぬ、憚ながら將軍樣の御用を達し、諸大名の御用を達して居る此奈良茂、以前より江戸では紀文か奈良茂と謠はれた身の上、まア紀文は此頃家が亂れ終に深川八幡の境内に小さい家を持つて僅か十人の人も居らない樣に零落して了つたが、奈良茂は益々盛んで木場の店も追々廣くなりお母樣が隱居して居つて、番頭も大勢付いて材木の方は今日では紀文以上、今は紀文は番頭庄兵衛に委せてあるが、庄兵衛中々一通りの奴ではないので、殘り少なの紀文の財產も何ふするか判らない、兎に角私の家が盛んであるに就て、お梅をば出す譯に行かぬ、お梅は是非此奈良屋の家で死んで貰ひませう、と思ふのですから何うか兄樣からも

宜しく言つて下さい　渡「茂左衛門殿のお言葉實に辱けない、渡邊何んとも御禮の申し樣も御座らぬ、お梅心得違ひを致すな、永く此まゝ生涯連れ添つて遣ると仰せられる、有難く思つて當家に居れ　梅「ハイ旦那樣のお傍に居られるなら、恁んなに嬉しい事は御座いません故、そんなら私は當家の仲働でも……　茂「馬鹿な、今まで奈良屋の女房であつたものが仲働なんて え事があるか、お前は茂左衛門の眞實の妻、何處までも其氣で遣つて呉れ、其代り遊ぶ位は許して大目に見て呉れ、

梅「そう仰有れば尙更嬉しう御座います、私も安堵して此家に居られます

（第六十五回）

お梅と渡邊とは奈良茂に氣の毒の餘り「お妾でもお留になつては」と申しますと奈良茂「妾などは止して貰ひませう、第一家の若い者の始末が付きません、昔の諺にも楚王細腰を好んで國中餓死多し、まア理屈を申す譯でも御座いませんが　渡「宜

しいでは御免被る」と其日は歸つて、扨て何うか好い妾が欲しい、何處かにありそうなものだと云つて、渡邊左近頻りに探し始めましたが、何うも好いのが無い、何處にあるだらうと方々聞き合はせたけれど、是れぞと云ふ者が御座いません、其内茂町の笹屋と云ふ御殿女中の周旋屋へ參りまして、尋ねました所其處の主人お濱と申すのが「宜しう御座います、今の處御殿上りかお妾になりたいと申すのが二三人御座います、如何で御座いますか一寸御覽下さいまし　渡「では御免被る」と上つて大廣間に据つて居りまするとと、次の間から出て參つたのは年の頃は十六七でもあらうかと云ふ美人ばかり二十歳の上を越した者は一人もありません、渡邊の前へズラリと居並んで一番最初は馬喰町一町目家主太兵衛近江屋清兵衛の娘お留、何んだか甘つたるい樣な容姿、絹小袖に紅色緞子の帶を締め端然と据つた、其次は淺草瓦町家主甚右衛門の店呉服商忠助の妹お傳、〻〻〻〻と申して、お味噌などは附いて居りません、今流行の元祿華麗模樣に紋附きて衣類、帶は龜綾と繻子の腹合せ、是亦

美しう御座います、次は京橋五郎兵衛町の家主嘉助の娘お鈴、縞縮緬の衣類置形紫鹽瀬の帶、次は麻布飯倉家主政吉店湖八の娘お源、十六無三四湖色の衣類、御所車模様茶色緞子の帶で中々の美人、其次は芝西應寺門前家主角兵衛店浪人立花庄七郎の養女お實、花盡しの燃みし衣類に紫の帶　渡「何れも是れも俺には皆好い　濱「そんなに氣が多くつては困ります　渡「實は拙者が何う斯う云ふ譯には行かぬので、お濱さん此中誰が一番だらう　濱「左様で御座いますお實さんが今年十八、此方はお源さんで、十七お鈴さんにお傳さんお留さん是丈けの中で、宜しいのを　渡「奈良茂の妾だから、奈良茂に一つ見せねばならぬ、兎に角皆を駕籠へ乘せて奈良茂へ連れて行ふ、何うか皆様御苦勞だが奈良茂まで同道して呉れ」「ハイ」と云つてお實は暫時言葉も無い、けれどもお傳は中々お轉婆　傳「アラマア奈良茂様ですか、私彼の旦那ならば……」是は堪まらん、何んだか譯が分らぬけれど靈岸島へ來て、主人よりも先づ第一にお梅に遇はせてやるとてお梅を呼ぶ、お梅は直ぐ其處へ來て見

ると五人の花盡しの女子が、ズツト並んで居る　梅「ホ、皆美しいこと」美人の中には「オヤ怖いこと」と後下りした者もあるが、獨りお實は「是がお内儀で御在しやいますか　渡「オー以前は噫、お前達の様に奇麗であつたが、瘡瘡の爲めこうなつたので、夫で妾を取持つと云ふ次第、お内儀から其旦那に取持つ妾ゆゑ、お前達も其積りで能く旦那に勤めて呉れ　實「ハイ夫では以前はお麗はしいお内儀が此様に……ア、お内儀のお心を思ひますればお愁傷しい」とホロリと落すお實の様子をお梅は熟と眺めて、扨ても情のある女と思つて居るとお傳が「是はお内儀で在しやいますか本當にお麗しい……お怖い」側に控へたお源「怖いこと、恰で鬼の様……」酷い事を云つたもの、其處へ奈良茂がヒョツと來て　茂「大變に女が來て居るなア梅「此内旦那様が何れでもお選り取りなされてお妾に　茂「兄様餘り早いぢや御座いませんか、まア宮女花の如しか、何んともかとも云ひ様がないなア、然し今はこう美しく見ても、一朝間違へばお梅の様、ア、人間の身程判らぬものはない　梅「サ

旦那様此内で何れでもお氣の召したのを　茂「何んと云ふ名だい　梅「お實さんお鈴さんお源さん此方がお傳さんにお留さん　茂「此内ドレでも俺が手に入れやうと云ふのか、お梅ドレが宜いお前が氣に入つたのなら俺の氣に入る」

（第六十六回）

梅「然う仰らずに旦那様がお擇り遊ばせな　茂「そうか、ぢや俺は少し了見がある、此の中何の女でも構はない只俺の云ふ言を肯いて呉れるのを擇ぶことにする、試驗と云ふのも可笑しいが、一つ筆を執つて見て呉れ、爰に紙があるから、お留様お前の様子を見たいから、何んとか一つ書いて呉れ　留「書けますかどうで御座います　茂「一寸で宜から書いて呉れ　留「ハイ」と筆を執つたから、華形流とか清華流とかを見事に書くかと思へば　留「私は何を書きませう　茂「何でも宜いや、留「夫では御覽遊ばせ」と書出したのは、まア旦那様お美しい、いろはに惚れた…

茂「オイ〳〵冗談ぢやない、何だいろはに惚れたとは　留「まア間違つたわ、ちりぬるお前……　茂「不可んなア今度はお傳さん　傳「ハイ、私文字は書けませんわ出來るのは三味線大鼓、サア三味線を持て御出しやい、當時の唄を遣りますお鈴様三味線をお持ち」するとお鈴は三味線を執り、お傳は咄嗟に大鼓を執つて立上り、何を行るかと思ふと「雪はチラ〳〵犬はワン〳〵奴様が德利持つて酒買に、酒で身體を暖めて、犬とネンネコするわいな……　茂「こう云ふ人を持つた日にや、奈良茂の家が打潰れて了ふ驚いたなア、今度はお實様お前何か出來るか　實「ハイ、何も出來ませんが……　茂「俳句の一つも出來るか　實「どうで御座いませうか、茂「オイ何か持つて來い、オー恰度爰に短冊がある、此短冊にお前の心を認めて實「この短冊に私の心を認めますれば……　茂「夫でお前は俺のまア試驗に及第すると云ふもの　實「ハイ」と云つて筆を染めたのは

野や山の錦に耻づる心かな

茂「ウン野や山の錦に耻づる心かな、面白いな、オイお實樣此腕前があるなら、何うだい爰に鬼の面と藤姫の袖があるが之で一つ」と云はれてお實又筆を執つて、認めんとすると茂左衛門「オーまだ百合の花がある」お實は其三つにて

鬼もありまた姫もあり百合の花

茂「成程百合には鬼白合も姫百合もある、ハテ之は誰かの作で聞いた樣だが、然し面白い思ひつき、俺は此お實が好いがお梅何うだい　梅「私はお實殿なら、何んとも申上げずお世話致したう存じます…　茂「お前が好いなら俺も可し、お實樣私の家に永く居て呉れ　實「御意に叶ひましたら……，傳「オヤオヤ夫位なら譯はありません、何んだ百合もあり鬼もあり姫の花　茂「ハ、、、まア好い、そんな事は後にして、後の者を只歸すのも可憐相だから」と殘らずの者に二十兩宛の金を遣つて、獨りお實を留め、お實の親仁を呼んで色々話をつけ樣と思つたが、眞の親は判りません全く假の親を呼んで證明させ、金百兩を遣りました、此假親と申すのは浪人で

立花庄七郎とて、餘り善くない人間眞の親は淺野内匠頭の浪人、夫が今は何處に居るかは判りませんけれど、兎に角お實を置くことにいたしまして、其腹からして一ケ年の後玉の樣な男の兒を設けましたから奈良茂も喜んで、茂吉と名附け奈良茂の相續といたしました、お實の養父立花庄七郎は奈良茂の爲めに樂々と暮せる樣な身になつて居つて、お實の喜びも一通りでなく、夫に就けても眞の父は如何なる人であろうかと、只其事のみを心配して居りますけれど、養父の庄七郎も之のみは明して呉れません、生きて居るのか死んだのか、浪人だとの事のみ如何なる人であるか一寸でも知りたいものと思つて一日も忘れはいたしません、すると或時お梅が「お實や龜井戸の天神樣に參詣しやうと思ふが、お前も一所に來てお呉れでないか、

實「ハイ姉樣が然う仰いますれば何處へでも參りませう　梅「では子供は誰かに預けて往つた方が宜かろう」固より財産家でありますから乳母も二人位ある夫に子供を預けて、お梅とお實は若衆の傅助嘉吉庄助の三人を連れて靈岸島を出でました

（第六十七回）

扨てお梅にお實は若衆二三人を連れて、深川に參り老母の御機嫌を聞いて、夫より高橋を渡り斜に切れて山王橋に出で夫より報恩寺に來る恩報寺から龜井戸天滿宮に參詣し、再び取つて返さうと致しまする、其時分天滿宮近邊には、其處此處に屋敷はあつたが、町家と云ふものは少ない吉田町と云ふ所へ近頃漸く町家が出來たが、是とても乞食の類のみ住んで居りまする、且つ其時分のことゆゑ夕方になつても軒に燈火一つないのでお梅等五人の者は未だ日の全く暮れない間に兩國まで駕籠に乘つて來れば善かつたが、駕籠には乘らずに歸り掛けた龜井戸を出る時は未だ早かつたが、女の足の捗らず日も漸々暮れかゝつた恰度今合羽干場の脇まで來ると、何者とも知れず、バラバラッと出て來て「オ、其處へお出なさるは奈良屋の奥樣並にお妾樣ですか、一寸お話が御座いまする、サ此方へ來て下さい」と云ひしなに、咄嗟

りお實を後より抱き込む　實「アレッ」と叫んだが其儘引擔いで田甫中へ埋然投げ倒した、此有樣にお梅は斯ふやつては居られぬ、早く此所を逃がれんと、元來し方へ逃出さんとする其後より、又もお梅に目隱しをした、夫と同時に氣も遠くなつてバッたり倒れた、曲者は皆で三人、今やお實を手籠めにしやうとする、附いて參つた若衆も大に驚き散々になつて仕舞つた、其お實の危うい所へ飛んで參つた一人の人物「己れッ」と云ひ樣手に持つた天秤棒で一人の曲者をビシャーリと打つた、其又後から鐵の棒を持つて來た者「この野郎ッ」と後の曲者を叩き附けた、此れに驚いて曲者も何所かへ逃げて了つた樣子、すると天秤棒で曲者を打つた男「オヤ誰かと思つたら、頭ですかい「オヽお前は孝行息子の喜市か、好い所へ來た何所の奥樣か知れぬが、吉田町自身番へお連れ申そう、お前も一人脊負つて行きな」喜市と云ふのが「合點だ」とソコデ二人が一人づつ脊負つて吉田町の自身番へ一目散に駈けて來る先に逃けた傳助嘉吉等は吉田町の自身番に駈付けて居つた所へ二人共助けられて來

たので傳助は早速深川へ飛んで參つて此事を告げる、まア吉田町の自身番で助かつたのは仕合せと、深川から駕の者が駕籠を持て迎ひに來て、お梅やお實は其駕籠に乘つて歸り、茂左衛門に此話をすると　茂「飛んだ目に逢つたなア、吉田町の人々に世話になつて默つて居る譯には行かぬ、俺が行つて何うかして遣ろう」と金三百兩を懷中に入れ吉右衛門と云ふ手代を連れて、吉田町の家主へ來ると　家「是は是は當時評判の奈良屋樣、能くお出で下さいました、貴方方が此地へお出でなさるとは夢にも存じませんでした　茂「來るも來ないもありませんが、實は我家で女房や妾が大變にお世話になつたと云ふので　家「へゝあれで御座いますか彼は此町で親孝行と評判の高い、齋藤貞之進の忰喜市で、今八百屋をして居りますが元を洗へば齋藤貞之進は、播州赤穗の御浪人で、イヤハヤ此人も仇討をすれば善かつたのですが、未だ年も若かつたからでもありませうが、大石樣や堀部安兵衛なんてえ偉い人があるに引代へ情けなくも此人は斬り込みの仲間へ入つて居らなかつたので、忰の

喜市と云ふのが今年十七歳、これは中々親孝行でそうして力があつて、播州赤穗の事を聞くと、お父樣は意氣地がない、俺が居つたら大石などと一所に夜討の仲間へ入つて、立派に殿樣の仇を討ち泉岳寺で見事腹を切つたものをと、何時も殘念がつて居りますが、親を大切に致しますので中々感心で御座います　茂「さうか、左樣な孝行の者なら其處へ行かう、そうして未だ一人働いて呉れた人は　家「彼は仕事師の亂暴者で彼の男は、鐵の棒で向ふの奴を叩き倒したと申しますが、奴にしては偉い事をやりました、亂暴者も其處へ行けで間に合ひます　茂「其お方の所へもお禮に行きませう　家「私が御案内致します」其處で家主の幸兵衛と一所に來ると九尺に二間の見るもいぶせき家、之れが孝行者喜市の家と幸兵衛が敎へて呉れました

（第六十八回）

奈良茂は家主幸兵衛に案内せられて喜市の家に參りまするとと、實に見るもいぶせき弊屋で御座いまして、先づ向ふを見れば豆腐屋其隣は鑄屋、片方は輕業師に豆僧、網渡、大道博奕其他僞盲者に僞跛者、僞躄、講釋師と云ふ連中ばかりズラリと並んで居るオヤ講釋師まで此連中の間にあるとキヨロついて歩きながら見ると幸兵衛、「オイお源さん家賃が三月分も滯つて居るが何うするのだい」と家主だけに小言を云ふ、此方では「サ、今に飯を賣に來るから飯を買へ」片方では「ア、錢がなくつて仕方がねえ、飯を質に置け」と焚立の飯を質に置いたりして居る、中には大層もない威勢で裸になつても構はぬ酒肴を買へ今日一日は裸で暮そうと、ワイ〳〵云つて居るのを見聞きして、成程面白い境遇だなアと思つて居ると幸兵衛「貞之進樣居るかい　貞「居ります、オヤ家主樣で　幸「お前樣を訪ねて奈良屋の旦那樣が……　貞「是は恐れ入りました　吉「初めてお目に掛ります、手前共のお内儀やお妾樣が御厄介に相成りまして　貞「イヤ何う仕りまして、何んとも云ひ樣のない見苦しい

所で　吉「就きましては昨日の御禮に少しでは御座いますが、二十五金　貞「イエ中々持ちまして二十五金など　茂「少々ではあるが是は貴方に贈ります悴の喜市樣も孝行者とて評判の好い方故心ばかりの御禮で御座ります、家内等の危うい所を助けて下さつた御禮ばかりでも御座いません　幸「取つて置きなさい」其内近所の者等がドヤドヤ來て「豪氣だな、親孝行の息子は持ちたいものだ、己の所の奴は親不孝で一文にもなりはしない　茂「お長屋は何軒程あります　幸「一寸三百軒許り御座います」其處で三百軒殘らず土産と云ふので　茂「では三百軒殘らず明日、金許りも不可ませんから米を百俵と金一分宛送ることに致しますから、分けて下さい　幸「エッ、米百俵に金一分宛……長屋へ分けろッてじすか、是は何うも　○「是りや有難いな、而して家主樣獨りで餘計取りはしないか　幸「オイ〳〵冗談云ふないの○「道が奈良屋樣は豪いなア、米百俵に金一分宛、何うだい有難いぢやねえか手前の壁も立つだろう　壁「餘計な事を云ふなよ」などと貰ひ物のあるのを皆で大騒ぎ

して嬉んで居る　茂「而して齋藤様、貴方は播州赤穂の浪人だとの事ですが……

貞「お恥しふ御座います、手前は元播州赤穂の侍で元祿十五年の仇討の時は私はまだ二十歳代で御座いまして、悴も未だ世にない時分私も仇討に出ればよかつたので御座いますが暇を貰つて夫なりけり、夫に妻も貰ひたてゝ御座つてな、夫や是やの情に引かされて、彼の樣な計畫があろうとは存じませんでした、夫以前に私共も近藤金次郎殿と一所に小山田庄左衛門殿にも面會致しましたが、其後あの計畫は止めたと云ふ話故思ひも寄らずに居りましたが拙者も後悔致しました、夫故今日でも悴奴に色んな事を云はれて實に面目次第も御座いません、播州赤穂の浪人仲間でも近藤金次郎や小山田庄左衛門は、此間深川の三角屋敷で下郎の直助に殺されたと云ふ話、其起りと云へば仇討の仲間に入つて主人の金を五十金貰つたが、其後仇討の事は忘れたか五十金を持て逐電したが爲め、下郎直助が今度見附けて殺したとの事、拙者は其當時左樣な金は貰はなかつたので今日斯る所に居られますシテ手前には一

人の娘が御座つたが、幼い時に立花庄七郎殿に貰はれて、其後一度尋ねて逢つて見たいと思ひますれど、其行衛が不明になつて居りまして逢ふ事も出來ませず、毎日何うして居るやらと……　茂「何に娘が御座つたと、シテ其名は何んと仰しやる、今のお話では立花庄七郎の養女になつたとか、ウンでは若しやお實と申すのでは御座らぬか　貞「オッ其お實、如何にもお實と申しまする、希ば貞實に此浮世を送り良き女になる樣にと附けた名前、今は何處で暮して居るやら」と我子を思ふ老の涙に奈良茂「オッ、では確かに其お實は俺の妾、茂吉と云ふ兒供まで產みました彼のお實は貴方が娘……」と云ふ言葉の終らぬ中に　貞「エッ、夫れぢや手前の實の娘が貴方のお妾で……」

（第六十九回）

喜「夫では昨夕救つた彼の美人は私の爲めには姉樣で御座いましたか　茂「ぢや齋

藤様縁に繋がる貴方は私の舅御　喜「御父様、姉様は死んだか生きたか又は他國へでも行つたのかと毎日心配して居りましたが、當時評判高い奈良屋様へ圍はれて今では子までも產んだと云ふ事、御父様恁んな嬉しいことはありません　茂「是も神、様の引合せ、今までに當人も養親は知つて居つても、眞の親は何處に居るやら今の今まで知らなかつたが、其產みの親に逢ふことが出來たら何んなに喜ぶことか、まア喜市益お前も今日から私の弟同様、是から奈良屋へ來なさい又何うにでもして遣る　喜「嬉しふ御座います、之を聞いて家主幸兵衛「齋藤様は奈良屋様の舅御で、喜市様は兄弟だな　○「ぢや此長屋は奈良茂の旦那と兄弟分かい　△「然ふよ、だから又た米百俵に金一分……　幸「オイそんなに慾張るぢやねえ　○「何にしろ有難い事があるもんだ」と焚き立ての飯を質に置き裸でも暮そうと云ふ連中に、米百俵と金一分宛だから、ソイ〳〵騒いで有難がるのも道理、奈良茂は我家へ歸り事の仔細をお實に話せばお實は夢かとばかり眞の親や兄弟に逢へるのを喜んで居ります

其内齋藤貞之進と喜市の二人は仕度を整へ元の武士になつて奈良茂の家に參り、親子三人顏見合せて之が我子か、之が眞の親か弟かと嬉し涙に暫時言葉もなかつたが漸くにして貞之進「これお實、私が眞のお前が親だぞ、今日まで日一日としてお前の事を思はぬ日とてはなかつたが、今日斯ふして親子が逢へるとは何んと有難い神の引合せ……　喜「姉様、私も今日まで姉があるとは聞いて居つたが、何處に居るのか夫れさへ知れず、何時逢へる事かと思つて居つた處、圖らずも此間助つたのが眞の姉様で今又こゝで逢へるのは本當に嬉しふ御座います　實「本當に此様な嬉しいことは御座いません」とのみ後は嬉し涙で言葉も出ず、其處へ庄七郎も出て來て「イヤ是は〳〵、拙者も貴方々の御蔭で今では左團扇で樂が出來る」と共々に悅んで居るに引替へ衣屋銀次郎親子は口惜くてならぬ、今日一間の内に集まつて、銀「サ下村様銀太郎濡髮の金五郎様一寸來て呉れ、お前様方彼の奈良茂の妾お實を龜井山から歸り掛け、引攫いで片付けてやらと云ふ計畫だつたが、却て打毆ぐられ

て了つたとは、下村様濡髪様餘り馬鹿氣て居るぢやないか　金「濡髪金五郎こう見えても綽名を取つた人間なれど、彼の時は形アなかつた、俺ばかりぢやない、玄達殿と一所に來なすつた銀太郎殿は、淺川進之丞に頼んで自分は先に逃げて了ひ、淺川と下村様と俺と三人で、何うも飛んでもない目に逢つた　銀「飛んでもない事は兎に角、娘のお町が此頃は奈良様へ嫁に行けぬからと、自棄になつて酒ばかり飲んで死んで仕舞ふと云ふし、今日も奈良茂から呼ひに來たので、夫は何んだと云ふと子供の祝ひだから俺と倅と娘に來て呉れと云ふのだが、就ては下村先生始め其席に濡髪様も淺川様も一所に行つて貰ひ、事に依つたら彼處で散々ドブついた揚句、御内儀はアンなんだから構はないが妾のお實を追出す工風して貰ひたい、濡髪様か淺川様何方でも好い、お實とは以前からの名染だとケチを附けて呉れ　金「宜しう御座います、拙者も錦糸堀の濡髪金左衛門、何んな亂暴も働いて居る人間、拙はお實とは昔から深い仲だと、怒鳴り込んで淺川氏と共に一つ違へば引拔いて叩き斬つて了ふ　銀「然うして下されば譯はない何分頼む」と先づ淺川を呼びに遣り、淺川も早速其處へ來た、お町は迚も奈良茂へ嫁に行くことは出來ぬと思ふ所から自暴自棄になつて、毎々來る淺川進之丞と折々出會つて、何時しか好い仲となつて了つて三日程になるが親仁の銀次郎はそんな事は知らず、惡い事のみ考へて居る

(第七十回)

下村玄達は今日は一つ奈良茂へ乘込んで、酒の座敷で毒でも喰はして遣ろうと思ひつゝ、銀次郎親子に下村淺川濡髪、中にもお町は美しい裝ひ、男は袴羽織と云ふので乘込んで其處へズラリと居並ぶ、座敷は道に立派で御座います、此日は本所吉田町の家主幸兵衛鐵の棒の三吉も來て居る、是は何時ぞやの御禮に百兩貰つたと云ふので、三吉は始終出入る様になつて居るので、今日は生れて始めての袴に五紋附の羽織で御座敷に据つたが、消防夫の頭も之には少々弱つたがウンと我慢して窮屈さう

にして居る、渡邊左近は云ふも更らなり二十幾人の客人其處で奈良茂「皆様何んにもありませんが御緩くり召上つて下さい、オヤ衣屋様何んですか、お町様の御連合でも連れて御出でしたか、下村様能くこそお前様は家のお梅の命の親　下「ド何う仕りまして　茂「此方の御方はまだお目に掛つた事は御座いませんか　淺「手前共は衣屋銀次郎殿と親友の間柄で、淺川進之丞、濡髮金五郎と申します　茂「お武家様で御在しやいますが、以後御見知り置かれます様　金「イヤ恐れ入りました」其處で酒宴が始まり最初に觀世流の能があつて、後は合の狂言、夫から色々の餘興があつて美しい別嬪が並んで酌に出る、此時吉田町の家主幸兵衛「イヤ御免下さい其處にお出なさるは錦糸堀の濡髮金五郎様に淺川進之丞様能くお出で」幸兵衛や三吉モー醉つて居る　三「金五郎様淺川様暫時でしたね　金「ヤー貴様は吉田町の…三「私ちや吉田町の三吉、御承知の濟淡ひ人足でがす、旦那方の目から見りや何んでも無いが、ヂャン〳〵と一つ半鐘が鳴らうもんなら、夫れ來たッと惡口持つて飛

出し、何んな火の中火の中、地獄の様な火の焰りを喰つてもピクとも仕ねえ吉田町の三吉とは私忘れも仕ねえ此春の事、此家の奥様やお實様が瓶井戸から歸り掛け合羽干場の田甫中で、へ、ッ二人の方を引攫はんとしたのはお前様だ、其處へ俺と喜一様とが運好く來合せ、俺には鐵の棒で打叩かれ喜一様には天秤棒で打殴られて逃げた時の形アなかつたね、オイ下村様お前様お醫者とは云ひながら餘り善い事は仕ねえで、お前様も其時の仲間だつたね、濡髮様何うだい豈夫忘れはしねえだらう、濡髮金五郎眞赤になつて「バ馬鹿なッ、不都合な事を云ふない　三「へ、ッ不都合ちやねえ、旦那當然ですせ　茂「サ、下村氏一つ、三吉餘り野暮な事を云ふな」と云ひつゝ茂左衛門盃を差す　玄「辱ふ御座います　茂「人間は色んな事があるもんだねえ、貴方々が私共の妾お實を引攫つたと云ふ噂もあるし、又夫ばかりぢやない貴方どう云ふ譯か知らんが、私の女房のお梅に何うも痘瘡の膿汁を取つて、恰度其時惡るかつた女房の肩へお入れになつたのではないかと云ふ疑があるので、夫は

今の今まで知らなかつたのですが妙な所から私が聞いて來たのですが、下村様貴方はお醫者でせうハ、、其お醫者と云ふ者は人を救ふのが役目、夫にお梅の肩を切つた前の晩、箱根の山で忠右衛門と云ふ百姓の娘のお花から松川痘瘡の膿を取つて、持つてお出でなすつたから、夫を何うする事かと蔭で見て居れば其翌日お梅の肩へ入れた様子だと告げて呉れた人があるので、私も疑つて居るのですが　玄「ソ、そんな……中々持ちまして　茂「證據がハキと無いから」と云つて居る所へ、今日來て居つた、八丁堀の旦那小池甚之進「下村玄達、今主人が云つた通り貴様は悪い奴だな、貴様は此頃兒殺を大分行つて、御殿女中を殺したと云ふ事、表立つて取調をしなくてはならぬのだが、今日は當家の祝ひ表立つて出來ぬ、玄達覺えがあるか

玄「ハイ〳〵　甚「濡髪淺川氏、御貴殿等も何か覺えが在らしやるか　濡「シテどう云ふ譯で」此時下村何思ひけん、懐に入れて置いた彼の秘相の班猫の毒藥、咄嗟取り出して銚子へ落し、何食はぬ顔して　玄「サ一献」と茂左衛門に差す、と茂左衛門「ヤ私は飲まぬ」すると隣席の濡髪何んにも氣が附かず　濡「では拙者が頂かふ」とグッと飲む

（第七十一回）

毒の入つて居る酒とは知らず淺川も飲んだ其後を茂左衛門衣屋に差す、衣屋も夫を取つて今度は下村に遣る、其間に下村玄達又も他の徳利に何時の間にか手品を以て例の毒を入れ、お町様一つとお町にも飲ませて了うた、其徳利を茂左衛門が取つて「サア下村様一ッ」と波々〳〵注がれ玄達之を飲まぬ譯には行かぬ、毒とは知りながら最早是までなりとグッと飲み乾せば、其徳利を取つて銀太が獨りでやつて居る、之にて悪徒悉〳〵玄達の毒を飲んだ、其内濡髪と淺川は面見合せ「モー斯ふなつては妾お實命はない覺悟をせよ」と立上つた、之を見て三吉咄嗟に向ふ鉢巻「何を吐かしやがる」と是亦立上る、貞之進「お實油斷をするな、サ遁よ」渡邊左近も一刀の柄

に手を掛け「何を無禮な奴輩」と睨みつけられ濡髪淺川「之は不可ん」と云つた時は、毒の利目は恐ろしいもの、全身毒が廻つて自由にならぬ、玄達此時「ウーン」と苦しき息を繼ぎ　玄「濡髪氏淺川氏、モー仕方が無い〳〵、御役人も茂左衛門樣も聞いて下さい、仕方がない天罰だ何を隱さう此下村は醫術を十分知つた者ぢやない此頃の天下泰下に風俗亂れ、多くの奥女中などが役者狂や男狂をするに附込み子殺しの藥を賣り附けて儲けて居た、今日まで殺した女は四五十人、惡事は夫より重なつて、千兩の金子を其處に居る衣屋から貰ひ、其代りお梅樣をば殺さず活かさず奈良屋を追出す樣にと賴まれ、天然痘の膿汁を肩の腫物の中へ入れ、終に今の樣な二目と見られぬ顏にしたのも此玄達、之で安心とお町殿を奈良屋の女房と思つて居る間に、お實と云ふお妾が來て子まで產んだ事故、衣屋主人も口惜しがり何うか一つと云はれて濡髪淺川兩氏と共に企てた先日の計畫は見事外れ、今日は酒の席で毒を以て相手を殺さうと思つて行つた事は、是亦外れて我仲間が飲んで了つた、濡髪

氏モー斷念て……　濡「夫ぢや貴樣俺に毒を……　玄「奈良屋一家に喰はせ樣と思つて入れた毒藥早くも奈良茂は見貫いて飲まず、夫を貴殿等が知らずに飲み二度目に入れた德利は、祭良茂に取られて拙者が飲まされ、衣屋樣もお町樣も飲んだ此方は殘らず毒敗けだ、お町「アー苦しい、淺川樣と言換はし子まで出來て居るのに毒を飲まされ……　銀「ぢや淺川と夫婦になると約束して……そんな事と知らなかつた恐ろしい事を仕やがつたなア　玄「何んと云ふても仕方がない、奈良屋の主人相濟みません、ウーン」と多く飲んだる毒の利目、玄達忽ち毒血を吐いて打倒れた、之を見て居た小池甚之進容易ならずと早速同役を呼び集める內に玄達濡髪淺川は終に死んで了つて衣屋親子は助つたがお町の腹の子丈けは死んだ、奈良茂は上に願つて內密に致し死んだ三人を立派に片方けたが此費用のみでも二三千兩を費つた、是に て無事に事は落着し奈良屋の家は安全喜市貞之進は非常に奈良屋の爲めに骨を折つて呉れる、其內享保十三年お梅は終に靈岸島で死去し立派に靈岸寺へ葬りました、

けれども母親は遠者で御座います、其後家内一同靈岸寺に先祖代々の墓詣を致しますると、編笠を被つた憐れな姿容をして奈良茂の墓へ來た者、誰かと見れば紀國屋文左衛門　茂「オー紀文様　紀「ヤ茂左衛門様」と云つた儘行過ぎんとする　茂「お待ちなさい紀文様、今は何うして　紀「イヤ自分も妹をお前の家へ遣つて置いたら、怎んな情けない事もなかつたろうに、妹も私が悪さに死んで了ふ、けれど奈良茂の墓に埋められたのを喜んで居ろう、此頃の我身の上は大きな身代を潰して八幡の境内に苦しい境遇、毎日妹の事を思ひ出しては此墓へ參詣して居るが、お前様は子供を連れて墓詣り嘸悦ばしいであらう、俺は子が無く二人で潰れで了ふ…　茂「貴方は未だソンな事を仰やるお年ではない、後生ですから眞人間になつて下さい、失禮ながら縁につながる奈良屋貴方の家を立てませう　紀「イヤ止して下さい、親仁は一代で金を造り、夫を二代目の私が費つて了つた、けれど家は潰れても天下の融通になつて居る、二代目の紀文は編笠被つて果てませう、金も今は要りません、

茂「そうでも御座いませうが、是から奈良茂へ來て下さい　紀「イヤどうか捨て置いて下さい」と其日は夫で別れて了つた、彼に奈良茂が金を送つたが受取らない故深川の貧民殘らずに紀文の施しだと云つて金三百兩を施したから、紀文の名は又高くなり、紀文は終に深川八幡の境内で死亡なつたと申します、奈良茂は六代目の茂吉が相續し明治の今日まで丁度十代無事で續き、神田の姓を名乗り東京で彌が上にも榮えて居ります次第は第一回に申上げた如くであります、之には靈岸島奈良屋茂左衛門一家繁昌の御物語落著と致します

奈良屋茂左衛門豪遊奇談終

明治四十年五月　日印刷
明治四十年五月　日發行
講演者　松林伯知
發行者　岩崎鐵次郎　東京市神田區鍋町二十一番地
印刷者　木村榮吉　東京市京橋區采女町十番地
印刷所　文英社　東京市京橋區采女町九番地
發兌元　大學館　東京市神田區鍋町廿一番地　電話本局三〇六七番　振替貯金口座番號四五一七

著作權所有

〔奈良屋茂左衛門栄遊奇譚〕
『正價　金參拾錢』

世界怪奇譚

押川春浪君著

全部六卷
正價各廿五錢　〇　郵税四錢

寫眞版挿入

第一編　奇人の旅行（十版）
第二編　世界武者修行（四版）
第三編　空中大飛行艇（六版）
第四編　怪人奇談（四版）
第五編　魔島の奇跡（四版）
第六編　續空中太飛行艇（六版）

二十世紀の滝栗毛は世界が舞踏である奇人あり其旅費百廿萬弗米國太平洋鐵道王が四ヶ月間花の英國交際場に侯爵の奇劇を演ずる美人は驚かす高貴の魂消久賀者亦一奇人の此の編は一冊三吸の節を分つ二十四時間全部次の人公蘭貝蘭次が如き件早く讀者の大陸を横行飛躍或は世界を提げて世界を拉いて痛快壯絶なる冒險を勇敢眼豚尾の驚

宋曾有の新發明空中大飛行艇は日本の理學士と獨逸の博士の手に依つて成り博士はこれを墨用して天空に飛ぶの樣事なる起し巴里市全市の大間美人なる理學士が義俠なる同志と共に捜索に向ふ

眉目清秀の一青年、一妖婆が兇文の爲めに其妻を醜惡なる友人の姦ぜられて煩悶痛苦する非幾句再回へる不思議なる話なり奇俠士は元ひ檀に回へる不思議なる話なり奇俠士は元ひ壯にして單場の花は嗚上に共に綿女童幼の愛舞措かざるべきもの。

航海王の大變怪船乘伯爾の初航海生理の法經の底の殺人地球の極の寶山地底の美少年白髮の老人と九人の黑奴卑亡人國の驚苦行片目と世界第一電氣の作用三十二の金門人魚と幽靈の霧歌無舞空中の電氣の作用三十二の金門人魚と幽靈の霧歌無舞空中の歸國附錄に巖窟の三人暗夜の白及を添ふ。

美人捜索に向ひたる空中大飛行艇の面々は流煙霧人を取戻し惡人の爲め壓ゆ苦み猛獸變人に逢ひ怪氣揚々として帰來し巴里全市の大歡迎に局を結ぶ前錄として諸君よりの答案を附したれば興味の行衛に就いて諸君より更に深きものある可し。

冒險奇怪文庫

羽化仙史著

全部拾貳卷

寫眞版挿入

正價各廿五錢 郵稅四錢

第壹編 九死一生 探險奇旅行

第貳編 探險小說 奇人の航海

第三編 冒險小說 新海底旅行

第四編 冒險小說 月世界探險

第五編 冒險小說 奇人の魔法

第六編 冒險小說 新ナポレオン

支那の一娘子米國の一丈夫と契り、萬里の鵬程途に颶風に逢ひ、娘子海中に沒す、丈夫失望煩悶の餘、決然として探險の途に上る、娘子の誘賊の慘禍に逢ひ、牢獄に苦しみ深山深林に入り誤つて千仞の谿に落つ、此間輕氣球上虎と鬪ひ、蛇と戰ふ、マラッカ國王に認られて閉門の嫌疑を蒙れ、此に丈夫と邂逅し、此に結縁の緣故めて全し。

空前奇妙の爆裂彈の發明者魁海の寶島に隱る、扶桑國の一士官海賊の巨魁の秘密箱を奪ひて寶島に到り、發明者の波瀾を受け士の新居に踏入る、士官マダカスカル孤島の偉人に逢ひて、具に發明の傍に投げ、乘じて屈折望遠鏡に依て、到る所の行衞を知り、遂に罪せられて已にこれを救ひ、遂に階老なる契を發明子と結ぶ。

少年の珍寶を相譯さんとの嬌子と經緯して結盟し、海底を占領して日本の版圖に加へる、玉の採拾に敵軍を傷けの大偉勳を企つ、或は鰐魚に悩され、或は敵の群族に圍まれて苦しみ、金銀の珍寶を採り、一團の中に、羽れて苦戰の末、遂に敵を倒して終に終を貫く。

せら被れ、奇人の千萬苦具に嘗め、月世界に飛揚す、未曾有の天地に何を見る、英傑の身は大發明の結果にして、奇人と如何に提携して行くか、怪力二個の身危きに、天涯萬里に悲絶の大空を踏むか。

遇ひて英雄あり、美人の如き偉力を以て、狼の醜を傳へ、大海を渡り、怪番ありて、驚天の奇術を傳ふ、一番二個の怪力の容貌に、下は狼の傍中に美人あり、無邪の鬼魂を探り、其の奇魔を恣にし、ナポレオンの遺少女の死を伯爵の奔に怪す。

丁卯の年、英雄の少年に幾多の英雄あり、危くも艱難を越え、讀者の惱を忍び、此書は救を施す、人をして其外に美人の快事あり、文字の妖魔あり、乞食を蹴る大王あり、怪妖蛇物の誘惑あり、地の新ナポレオンに戰を挑み、死し、一妖の美人ありて世界を驚かす、萬金を投じて危禍に狂ひ、大地を動かす快事の事實。

冒險奇怪文庫

羽化仙史著

全部拾貳卷

寫眞版挿入

正價各廿五錢 郵稅四錢

第七編 冒險小說 船幽靈

第八編 冒險小說 妖怪山の英雄

第九編 冒險小說 生？死？

第十編 空中電氣旅行

第十一編 冒險小說 食人國探險

第十二編 冒險小說 續食人國探險

船幽靈とは何か、奇術を弄して海上に各國の船舶を惱め人を殺し財を掠む、世界各國驚愕恐慌、水利の便宜人ご絶少、我が硬骨男兒之を憂ひ哲人、壯夫、相臨つて帝國海上覇王の實を擧けんとし二人の少女亦艱難辛苦挺身敵地に入つて仁王的巨人と死生を爭ふ。

非凡の人傑あり、亞弗利加の天地を縱横す、姉？妹？絶世の佳人嫉に苦しみ嫉妬に惱む、一俠兒あり猛獸を友にして不思議の怪力あり、或は獅子に攫はれ、或は魔山に逃ひ、毒殺あり、慘殺あり、暗殺あり、國と人との運命如何、讀むもの珍話と奇聞に駭目驚魂せずんばあらず。

死の手は新ナポレオンを捉へたり、彼山深世の夜叉大王恨を呑んで遂に逝く、一雄斃れて一雄興り局面一變、朋友この新ナポレオン威を四隣に振ふ、其間父子の情、の神聖の戀愛ありて、白刃の下音樂を聞くの慨なきにあらず。

美人、月宮の中天に飛んで蹤跡を失す、太陽に焚殺せられたるか、驚鳥に拐去られたるか、生？死？東西南北搜さして消息なし、こゝに於て空中電氣旅行の計畫あり、探察隊中、學者あり、姉あり慘死あり、世界探險の間題とすれば本書はこの解釋なり。

屠殺あり、牛埋あり、水火の責あり、かくの如き難あり、蠻境の怪人、毒手を逞ふして、年に月に害を致すもの、幾百千人有志數人、危險を冒して、生命を輕じ、鬼域に入り、妖地を殆んで兇惡を感化し、犧牲たらんとす、代議士して成功したるや否や。

英雄あり、美人あり、烈婦あり、快男子あり、才子あり學者あり、幾度か生死の間に出入し、上毛の地にして長く旭日の恩に浴せしめて前編に優る壯快談。

乾坤獨歩著

世界統一冒險譚

全部　卷

正價各廿五錢　郵税四錢

寫眞版入

第一編　青年英雄團

第二編　世界發展倶樂部

第三編　怪中の怪

第四編　賊巢探險

第五編　キウリアスアイランド

第六編　怪寶窟

池田鉛水君著　（寫眞版入）　（三版）

○無錢修學

價廿五錢　郵税四錢

本書の目的は貧年が苦學力行を奬勵するに在り、因循姑息の念を除去するに在り　獨立自活の法を敎ふるに在り　或は新聞配達となり　立坊となり貸家捜となり、托鉢坊主となり　車夫となり　苦心困難の境遇を小説的に描に出す　附錄學生自活法

早田玄瀾君著　（寫眞版挿入）　（五版）

○膽力修行

價廿五錢　郵税四錢

風雨の暗夜荒社廢寺を探り、刑場古墳を尋れて膽力を練磨したる實歷を描寫せるもの目次を一覽し如何に本書の趣味饒多にして練膽の道に益あるかを知る可し曰く人魂曰く古寺、化地藏、古刑場、水塚離、丑の刻、古墳の樹、墓窟の一夜、食人怪、死人、、青面鬼等三十六項に分つ附錄として釋宗演禪師の座禪工夫を載す

加藤花邦君著　（寫眞版入）

○探險小説　ペタゴニヤ仙窟

價十八錢　郵税四錢

本書は名門に生れし硬骨男子が威勢に屈せず奮然として故郷を後にし彼の如く美に才智膽力有智男子を淺ぐ妙齡の美人と相携へて萬里遠征の途に上り遂に一箇の慨丈夫と逢ひ南洋の黄金窟を探險するの奇々妙々の珍小説

矢野滄浪君著　（寫眞版入）　（三版）

○食客

價二十錢　郵税四錢

本書は著者が實驗せし事柄を言文一致を以て描かれたるものにして食客が辛酸困苦の境遇不平憤懣の生活叙むものをして身その中に在るの感を起さしむ窓に近時片々たる駄小説に比して趣味優ること數番なるのみならず苦學の書生に慰樂を與ふること甚だ多し。

押川春浪君著　（寫眞版挿入）　（六版）

世界奇拔譚第一編　新アラビヤンナイト　價廿五錢　郵稅四錢

「アラビヤンナイト」は天下の奇書にして苟くも小說を作るものゝ一讀せざる事なし本書はスチウエンソンの原案を基として著者が例の豐富なる風想を流暢なる筆を以て綴りたるもの、趣味遠に「アラビヤンナイト」の上にあり。

押川春浪君著　（寫眞版挿入）　（四版）

世界奇拔譚第二編　ヘーグ奇怪塔　價廿五錢　郵稅四錢

奇怪塔あり、大戰亂を隱し、勇士の最期に及び黑百合花の效明となり、空前の大懸賞となり、將軍の幽靈を顯出するの奇譚を經とし、絕世の美人が勇俠を綜とす原書は歐洲大評判の小說更に著者の奇想を加へ趣味を倍ふて此の編成る以て本書の趣味を知る可し。

押川春浪君著　（美術寫眞版）

世界奇拔譚第三編　立身膝栗毛　價廿五錢　郵稅四錢

那翁が佛國の皇帝となりし時、玉座の前に來りし一少年こそ本編の主人公にて、其後那翁の批評の言に動まされて、偉大の人物となりしや否やは彼れが運命の駒に跨つて奇なる人生の長旅を試みし所の物語、山あり、河あり、美人あり、魔城あり、その面白き事恰も武者修行が世界各國を經廻り千變萬化の奇事に遭遇すると異ならず。

押川春浪君著　（寫眞版挿入）　（六版）

航海奇譚　價廿五錢　郵稅四錢

大洋と言ふ已に快也、航海と言ふ已に壯也、奇譚といふに至つては已に就ふて讀まざる能はず、大平洋を跳る船大四洋に沈む船、甲板に居りし神出鬼沒の活劇、奇絕にして趣味多く快絕にして感興甚だし。

目（海上の怪、孤島の奇遇、幽靈島、海の奇婦人、海賊、軍士官、無名の叫、俠血二人、男兒二人、胡弓師、

羽化仙史著　（寫眞版挿入）　（再版）

冒險小說　百難旅行　價二十錢　郵稅四錢

一難去れば一難來り前門虎を防げば後門狼を迎ふ、饑渴か寒に困み暴風か雨に遇ひ或は放浪、或は漂流、水火の巷に出入し餓鬼の間に輪轉す、一少年が勇と義膽とは讀む者をして感慨興起せしめずんばあらず、蓋にこれ冒險小說中の傑作。

加藤化邦氏著　（寫眞版挿入）　（再版）

モンゴリヤ妖怪村　價廿五錢　郵稅四錢

征露の役軍中より選まれて斥候として派遣せられたる三勇士が道を失ふてよりさまゝの怪事奇蹟に遭遇し或は虎に襲はれ妖怪を退治し幽靈と戰と危難に類し災厄に遇ひ遂に戰死せしと思はれし三勇士が難なく歸つて大功を現はす快譚なり。

羽化仙史著　（寫眞版挿入）　（再版）

奇女無錢旅行　價廿五錢　郵稅四錢

一奇女あり容貌花の如く音聲玉を轉ずるが如し而も膽力過に有餘男子を凌ぐ囊中一錢の貯えなく英國、佛國四、獨逸、米國等歐洲大陸を跋涉し到る處奇談珍說の中心となる讀者幸に性慾として自失せずんば幸なり。

米國　ミス、マロック寫眞著　三浦天眞君譯

新空中旅行　價廿五錢　郵稅四錢

一王國の王子が王位に即き攝政の叔父のため一位を奪はれ一孤塔の中に幽閉せられしに王子の降誕前日より不思議なる老婆現はれ此に王子のために或は靈猿となり或は智識を增さしめ空中を飛行する等自在なる隱禮切れを與へ王子に故郷を眺らしめて自分を自覺せしめ遂に王位に還ると云ふ不思議なる少年小說なり。（再版）

三宅青軒君著　（寫眞版入）

武士道小說　土手の道哲

價廿五錢　郵稅四錢

忠義無双の美男子、艶麗無比の美女に懸せられ、暗君暴臣の奸計に依つて其父は切腹家は退散、其名滿都に轟く、俠客と天下無双の力士と師弟の契を結び、練磨の柔術よく弟士をして鬼の下開山横綱たらしめ、一夜の契り、助太刀の奮闘く、觀者に心臟の工夫を練る、誠は實に佳境に進む

三宅青軒君著　（寫眞版入）

武士道小說　續土手の道哲

價廿五錢　郵稅四錢

不思議の再會に、夫婦の緣未だ消せず、宗家の安全を計つて幾度か死に臨み幾度か危に遇ひ、力士、俳客、忠僕、師弟の義俠よく、奸臣を滅して君家始めて安し而も絶無常會者常離、浮生の果敢なきん悟つて、劇藝染衣、道傍の哲人となつて煩惱の避子を飛む人間一代の轉變を描いて妙味津々、

廣津柳浪先生序
有本天浪君著　寫眞版入

家庭小說　女天一坊

價廿五錢　郵稅四錢

妖婦二人結托して暗惡なる華族の當主を惑亂し賢良なる夫人と令孃は或は無限の怨を含んで死し、嬰々の情に堪へずして踪跡を失す、義俠なる紳士夫婦は孤女を救ふて陰謀の顚末を暴露し、令孃を保護して美領地に全く妖婦忽ち却けられ家庭は圓滿、結婚式の慶事に局を結ぶ人情の秘を穿き、社會の裏を暴く、

鹿島櫻巷君著　寫眞版入

ロナヘット探險　無底湖の秘密

價廿五錢　郵稅四錢

「世界秘密國」に顯はれたる冒險者の一人山佐武雄の實地見聞せる怪談珍話を述べたる事實にして、愈々出でゝ愈々怪、四藏西北原の雪嶽は如何、一の處女なく一の奇語なし、極秘極怪の物語りはこれ一

櫻川孝雄著

頓智百話

價十五錢　郵稅四錢

本書は古今の英雄豪傑、名僧、賢女、詩人騷客、頓智高僧等凡て世に傑出したるもろ〳〵の人物が其奇才頓智に依つて身命を全うし、難を免れ、奇利を博し、名聲を揚げ、或は國のために、家の爲めに、君の爲めに、父母親族のために、敵國の爲めに、或は一身のために、せる奇談珍話百を、更に硯矢攻擊の筆を振つて眼前に陳るが如く、彼等に驚くが如く、描き出だせるものなり、以て談話會の好材料とすべく、家庭の教訓とす可く近時絶にて見ざるの珍奇なり。

朕　先　子著

奇談百出　滑稽大集會

價十五錢　郵稅四錢

本書は古今東西に奇談、珍話、落語、一口噺、滑稽噺等すべて蒐むるものをして按腹絶倒せしめ、お腹の宿毒をなさしめ、眼のかさがねを外さしめんばやまず、國笑樂る塩（切れずに噴き出す可く、聞廻る孔子も苦笑するけら〳〵と大口開いて噴き出す可し、諸君の退屈する時、屈託する時、煩悶する時、一度此書を閲めば忽ち抱天主義となる必寄席へ行つたよりも効能があるなり。

崎來橋君序　軒端道人著　（寫眞版入）（三版）

抱腹絶倒　大笑百話

價十五錢　郵稅四錢

滑稽の人に巻ある為材為主をして騙結として騙稽する過ぎらしめ斷腸の世に列ある笑ふ門には福来るの個諺文藝しても明なり滑稽百話の人情を知けて滑稽百話に接に處世の秘訣を教ふるを古今東西其例多からず飯綱の中瓶測あり爆笑の間よく禍を防ぐ、かの人生口を開いて笑ふ事難しと嘆じ、一日主人笑ふ事難しと嘯つ者もし本書を編いて一頁せば一節は二節より二節は三節より三節は五節に到りて必ず抱腹せん絶倒せん、本書は實に病者に對して醫藥に優り、閑者に對して天來の妙音なり

可笑樂喜著

滑稽大笑種本

價十五錢　郵稅四錢

本書は古今和漢東西に渉りて抱腹絶倒滑稽無類の一口噺、落語、狂語、百數十編を網羅せるもの臨刻あり欲調あり、駄洒あり、個あり、俗あり、老幼貴賤賢愚美醜錯綜して各種各樣の藝談あり、武士商人、車夫船頭、結、髪、型、親爺、息子、高僧、女學生、社會各面の人物が各々艶色の滑稽を發揮して笑ふ可き唱々出す可き調が茶を沸かす可き珍無類の奇書なり。

三宅青軒君著（寫眞版入）

探奇小說 不思議の娘

價三十錢　郵稅四錢

花の如き乙女忽然として孤兒院に降る、天よりか、地よりか奇々怪々の疑團に華を起し、清廉の君子あり無名の奉仕あり慈母の如き婦人あり仙骨ある醫伯あり變幻出沒驚者冥々として闇夜を辿るが如し　既にして月光忽ち明に秋風颯々花の如き　乙女は玉の如き青年と仙老の契を結ぶに到つて疑團氷釋す、

曉鳳山人著（寫眞版入）

探奇小說 秘密の怪洞

價廿五錢　郵稅四錢

佛國名家の御男ずとして消息なし、遺產相續の野心ある二人の男女戀愛の爲めに相反し、利慾の爲めに相反目し非命に死するを緣とし雛船して救はれたる　乙女、嫉妬の爲めに無底の怪洞に陷り、九死に一生を得て海賊の爲めに英國に送られ父子再會するに局を結ぶ、戀愛あり、義俠あり、冒險あり野心あり、讀者をして興趣に堪へしむ。

鹿島櫻巷君著（寫眞版入）

探奇小說 世界の秘密國

價廿五錢　郵稅四錢

世界の秘密國として　有名なる四獄　探險の勇士者として生死を知らず　捜索者更に魔法に依て　生地獄に落ちて返らず此に於て、志士同志と共に百難千難を冒し猛獸蠻人と戰ひ遂によく目的を遂し　秘密の大寶庫を開いて全世界を驚嘆せしむ、寔に無類の怪奇文字

福田琴月君著（寫眞版入）

滑稽小說 臆病將軍

價廿五錢　郵稅四錢

過ちの功名は男士の書を得死物狂ひの　滅茶々々　働には死ぬに極まつた生命を拾ひ、思はぬ所で戀人に邂逅するなと臆病詩人が　滑稽の經歷には　人の運命の如何に不可思議なるかを嘆ぜしむ　血腥き風吹けば　蜜の如き雨降る寒に妙味掬々として盡きざるの文字

平井川南君著

- 滑稽大寄席（寫眞版入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 嫌苦樓千鳥著　滑稽落語集（寫眞版入）　價十五錢　郵稅四錢
- 宮崎來城君序　抱腹絕倒大笑百話　價十五錢　郵稅四錢
- 隅川老禪著　機智橫溢頓智百話　價十五錢　郵稅四錢
- 哄笑子著　百出奇談滑稽大集會（寫眞版入）　價十五錢　郵稅四錢
- 鳥笑樓喜樂著　滑稽大笑種本　價十五錢　郵稅四錢
- 甘蔗子著　抱腹絕倒放屁百話（寫眞版入）　價十五錢　郵稅四錢
- 隅鳥子著　軍人頓智叢談　價十五錢　郵稅四錢
- 笑門福來著　滑稽抽本落語珍話會　價十五錢　郵稅四錢

野狐狂禪著

- 一休和尚頓智笑話（寫眞版入）　價十五錢　郵稅四錢
- 天賜居士著　大久保彥左衞門笑話（寫眞版入）　價十八錢　郵稅四錢
- 南園生著　曾呂利新左衞門笑話（寫眞版入）　價十八錢　郵稅四錢
- 園齋狂生著　大岡越前守頓智談（寫眞版入）　價十五錢　郵稅四錢
- 尾花庵二十坊主著（寫眞版入）　水戶黃門奇行談　價十八錢　郵稅四錢
- 尾花庵二十坊主著（寫眞版入）　大笑下女百話　價十五錢　郵稅四錢
- 年期小僧與太郎著（寫眞版入）　大笑小僧百話　價十五錢　郵稅四錢
- 十返舍一九著　尾花庵二十坊主著（寫眞版入）　東海道膝栗毛　價十八錢　郵稅四錢
- 十返舍一九著　尾花庵二十坊主著　機智橫溢料理　續東海道膝栗毛　價十八錢　郵稅四錢

五峰仙史著 小説 滑稽 道樂和尚 (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

五峰仙史著 小説 滑稽 空想病 (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

五峰仙史著 小説 滑稽 自惚れ男 (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

五峰仙史著 小説 滑稽 女學生旅行 (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

五峰仙史著 小説 續滑稽 女學生旅行 (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

五峰仙史著 小説 滑稽 東京見物 (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

五峰仙史著 學生生活 滑稽 遊學 (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

早田芝洞君著 小説 膽力修行 (寫眞版入) 價廿五錢 郵税四錢

宮崎來城君著 小説 無錢旅行 (寫眞版入) 價廿五錢 郵税四錢

宮崎來城君著 小説 乞食旅行 (寫眞版入) 價廿五錢 郵税四錢

饑脚子著 小説 野宿旅行 (寫眞版入) 價廿五錢 郵税四錢

饑脚子著 小説 貧乏旅行 (寫眞版入) 價廿五錢 郵税四錢

天涯歸客著 立志實傳 北米無錢渡航 (寫眞版入) 價廿五錢 郵税四錢

五峰仙史著 小説 歸省旅行 (寫眞版入) 價廿五錢 郵税四錢

五峰仙史著 喧噪 抱腹 滑稽旅行 (寫眞版入) 價廿五錢 郵税四錢

五峰仙史著 奇談 洋行 世界滑稽旅行 (寫眞版入) 價廿五錢 郵税四錢

順病古武士著 小説 賢妖怪百話 價十五錢 郵税四錢

篠原嶺葉君著 小説 家庭 新不如歸 (密蔵寫眞入) 價三十錢 郵税四錢

篠原嶺葉君著 小説 家庭 ハイカラ令孃 (密蔵寫眞入) 價三十錢 郵税四錢

篠原嶺葉君著 小説 家庭 續ハイカラ令孃 (密蔵寫眞入) 價三十錢 郵税四錢

篠原嶺葉君著 小説 家庭 可憐孃 (密蔵寫眞入) 價三十錢 郵税四錢

篠原嶺葉君著 小説 家庭 續可憐孃 (密蔵寫眞入) 價三十錢 郵税四錢

篠原嶺葉君著 小説 家庭 戀の妻 (密蔵寫眞入) 價三十錢 郵税四錢

篠原嶺葉君著 小説 家庭 續戀の妻 (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

花園小史著 小説 家庭 戀無緣 (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

無名氏著 小説 家庭 貞か不貞か (密蔵寫眞入) 價三十錢 郵税四錢

草の人著 小説 家庭 戀夫婦 (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

草の人作 小説 家庭 人生の行路 (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

廣津柳浪君序 有本天涙君著 小説 家庭 女天一坊 (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

草の人作 小説 家庭 戀の罪 (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

草の人作 小説 戀愛 戀か夢か (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

草の人作 小説 女心 (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

池田錦水君著 戀の一年有半 (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

池田錦水君著 小説 女學生氣質 (密蔵寫眞入) 價廿五錢 郵税四錢

弁上九稱著編
◉新婚百話（花嫁）　價二十錢　郵税四錢

河村扶桑君著
◉武士道百話　價十五錢　郵税四錢

長田偶得君著
◉明治六十大臣（寫眞版入）　價三十錢　郵税四錢

靈堤隱士著
◉大臣の書生時代（寫眞版入）　價三十錢　郵税四錢

矢野滄浪君著
◉食客（寫眞版入）　價二十錢　郵税四錢

池田錦水君寫
◉無錢修學（寫眞版入）　價廿五錢　郵税四錢

靈堤隱士著
◉青年志立人物の食客時代（寫眞版入）　價十八錢　郵税四錢

靈堤隱士著
◉商人立志豪商の雇人の時代（寫眞版入）　價十五錢　郵税四錢

西山英雄君著
◉品性修養英雄の道樂（寫眞版入）　價二十錢　郵税四錢

桐友散士著
◉暗面觀夜の女界（寫眞版入）　價廿五錢　郵税四錢

厦門散士著
◉社會各面明治娘評判記（寫眞版入）　價二十錢　郵税四錢

原田東風君著
◉木賃宿（寫眞版入）　價廿五錢　郵税四錢

池田錦水君著
◉奥樣と孃樣（寫眞版入）　價廿五錢　郵税四錢

池田錦水君著
◉婦人と戀愛　價二十錢　郵税四錢

池田錦水君著
◉境遇各面戀の解剖　價二十錢　郵税四錢

池田錦水君著
◉社會各面戀の婦人氣質　價三十錢　郵税四錢

池田錦水君著
◉社會各面女心の解剖（八版）　價三十錢　郵税六錢

長田偶得君著
◉妖怪奇談　價十五錢　郵税四錢

鶴瓜讀樂著君
◉家庭小說新婦の秘密（密畫寫眞入）　價廿五錢　郵税四錢

草の人作
◉家庭小說深山の夫婦（密畫寫眞入）　價廿五錢　郵税四錢

草の人作
◉家庭小說理想の妻（密畫寫眞入）　價廿五錢　郵税四錢

草の人作
◉家庭小說新家庭（密畫寫眞入）　價廿五錢　郵税四錢

須藤寒泉君作
◉家庭小說戀の果（密畫寫眞入）　價廿五錢　郵税四錢

生田葵山人著
◉家庭小說貴族の戀（密畫寫眞入）　價廿五錢　郵税四錢

羽化仙史著
◉家庭小說財婚夫人（密畫寫眞入）　價廿五錢　郵税四錢

鶴瓜讀樂君著
◉家庭小說妾腹華族（密畫寫眞入）　價廿五錢　郵税四錢

鶴瓜讀樂君著
◉家庭小說禍妾腹華族

逆川樓主人著
◉家庭小說露子（密畫寫眞入）　價廿五錢　郵税四錢

福田孝月君著
◉滑稽小說臆病將軍（密畫寫眞入）　價廿五錢　郵税四錢

賭月山人著
◉滑稽小說魔窟の女（密畫寫眞入）　價廿五錢　郵税四錢

府南隱士著
◉怪奇小說新クレオパトラ（密畫寫眞入）　價廿五錢　郵税四錢

府南隱士著
◉怪奇小說續新クレオパトラ（密畫寫眞入）　價廿五錢　郵税四錢

羽化仙史著
◉怪奇小說薄命美人（密畫寫眞入）　價廿五錢　郵税四錢

羽化仙史著
◉怪奇小說モデル姫（密畫寫眞入）　價廿五錢　郵税四錢

夏島櫻巷君著
◉探奇小說變裝の怪人（寫眞版入）　價廿五錢　郵税四錢

252
903

大阪時事新報掲載
松林伯知口演
奈良屋茂左衛門 豪遊奇談 郵税三十四錢

池田夕風女史著 家庭小説 二人妻 寫眞版入 郵税廿四五錢

三宅青軒著 豪傑小説 我儘太郎 寫眞版入 郵税廿四五錢

三宅青軒著 豪傑小説 續我儘太郎 寫眞版入 郵税廿四五錢

五峰仙史著 抱腹絶倒 滑稽豪傑書生 寫眞版入 郵税廿四五錢

篠原嶺葉君著 家庭小説 ハイカラ夫婦 寫眞版入 郵税廿四五錢

篠原嶺葉君著 家庭小説 新婚旅行 寫眞版入 郵税廿四五錢

篠原嶺葉君著 家庭小説 未來の妻 寫眞版挿入 郵税廿四五錢

草の人作 家庭小説 戀の旅 寫眞版挿入 郵税三十四五錢

草の人作 家庭小説 捨てたる戀 寫眞版挿入 郵税廿四五錢

羽化仙史著 怪奇小説 活幽靈 寫眞版挿入 郵税廿四五錢

羽化仙史著 怪奇小説 怪獨髏 寫眞版挿入 郵税廿四五錢

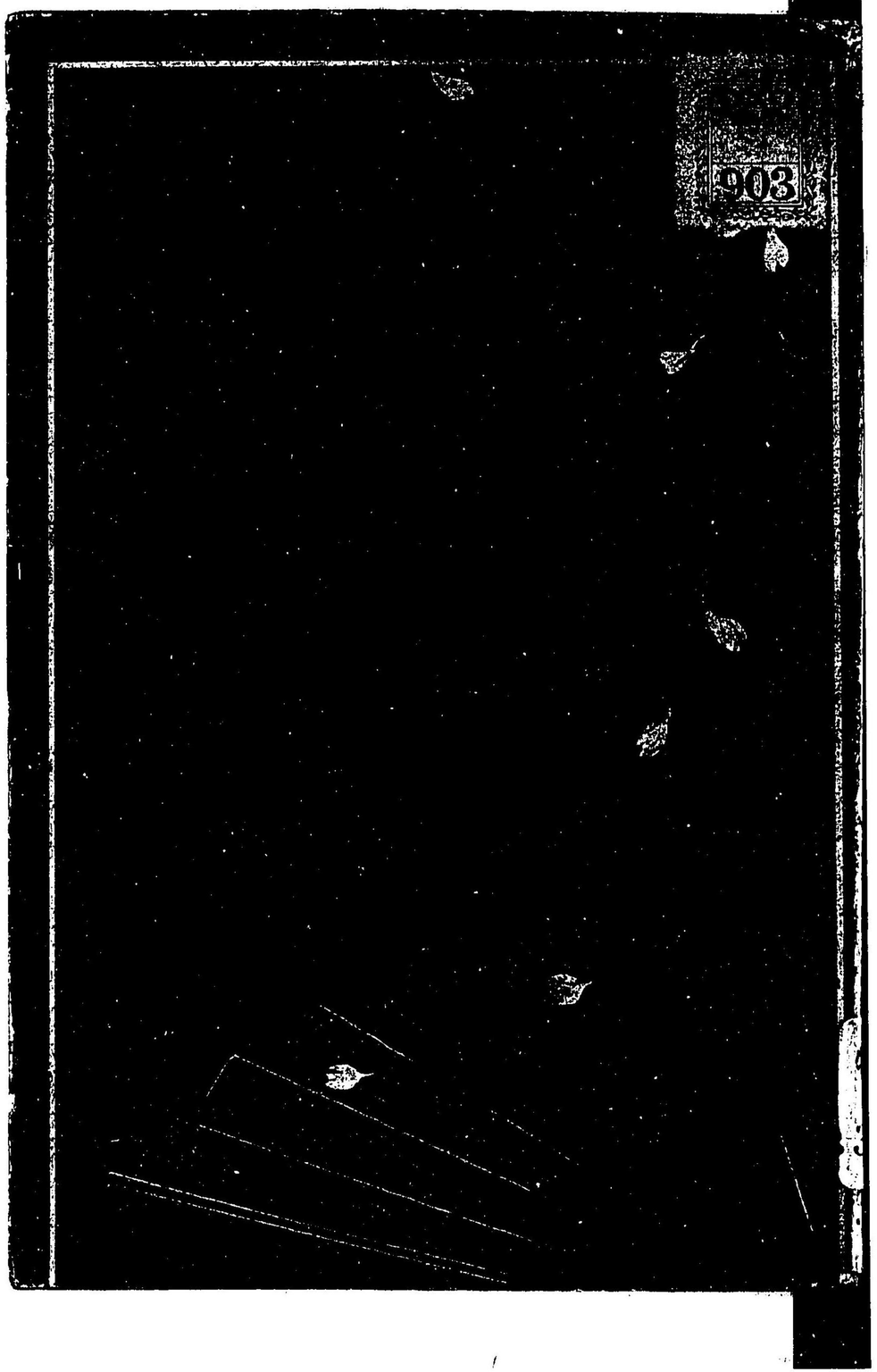
羽化仙史著 探奇小説 舊情婦 寫眞版挿入 郵税廿四五錢

鹿島櫻巷著 怪奇小説 秘密島 寫眞版挿入 郵税廿四五錢

雨廼舍主人譯 怪奇小説 死人ケ濱 寫眞版挿入 郵税三十四錢

雨廼舍主人譯 怪奇小説 續死人ケ濱 寫眞版挿入 郵税三十四錢

東京大学蔵



097465-000-4

特13-349

奈良屋茂左衛門豪遊奇談

松林　伯知／口演

M40

DBS-1370